とある科学の完全調整（フルチューニング）

うきせくさこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある科学の完全調整（フルチューニング）

【Ｎコード】
Ｎ８６３４Ｗ

【作者名】
うきせくさこ

【あらすじ】
起きたら裸で見知らぬ殺風景な部屋。しかも女になってる?!白衣の男にミサカ００００００号と呼ばれる。ミサカ?フルチューニング（フルチューニング）?取り合えず裸見んな！

『とある魔術の禁書目録』の世界を舞台にミサカ００００００号に憑依した男の死亡フラグ回避ストーリー

第一話

目を覚ますと真っ白な部屋だった。自分の家には、こんな部屋なんてない。

寝ぼけた頭で昨日の事を思い出す。昨日はたしか自室のベッドで眠ったはずだ。じゃあここはどこなんだ？

辺りを見回してみる。いかにも病院とかで見かけそうな機材（脈拍やら脳波測りそうな機械）やらが周りにあって、生活感のカケラもない。

もしかしてここは病院で、寝ているうちに運び込まれたんだろうか？

取り合えずベッドから起き上がる。てか服着てないじゃねぇかと、視線を下げると寝ぼけた頭が完全に覚めた。

――――２０数年お付き合いしてきた息子がいない！？代わりに胸がほんの少し自己主張しているし！起きたら女になっていた！

「起動したか、ミサカ００００００号（フルチューニング）」

一人混乱していると、白衣の男が部屋に入ってきた。黒髪がボサボサっとしていて体格がヒョロッとしたいかにも研究者な中年の男である。

さて混乱している俺はこの時どんな答を出したか？

気付いたら女になっていた→白衣の男は何か知っている→こいつが犯人→今の状況、少女の裸→元男と男が織り成す１８禁なことをされてしまう→ヤられる前に殺れ

普通に考えればどう考えてもおかしいのだが、混乱してるのと、女性の体になり見知らぬ男に裸を見られた嫌悪感からか、怒りが沸々と沸き上がり

「てめぇ、こっちにくるんじゃねぇぇぇっ！！！」

と男めがけて殴りかかった。

殴ろうと拳を突き出した瞬間、バチバチと音がなり、拳が光りはじめた。

「やめッ！？ぎゃあああああああぁぁぁぁ！！！！！」

やめろと言われても、拳はすんでで止まったが帯びた光は止まらない。結局光が男に触れた途端、男は激しく痙攣して倒れた。あ、口から泡まで吹いてる。

改めて拳を見る。先程よりは幾分が眩しさは衰えたが、相変わらずバチバチと音が鳴っている。

――これはもしかして電気か？ロリコン変態野郎による貞操の危機を前にして、能力（）が目覚めたとかいうやつなんだろうか？

――そんなバカなことを考えながら、この世界の――ミサカ０００００号としての日々（フルチューニング）が始まった。

第二話

白衣の男との一連の騒動は外まで響いたらしい。慌てて研究員らしいやつらが何人か駆け付けてきた。（こちらも慌ててベッドに逃げ込んだ）

白衣の男は失心したままなので、襲われそうになったから殺った、反省はしていない――と彼らに伝えた。白衣の男が研究員に運ばれて行くとき、彼に対する視線がやや痛かったのは仕方ないだろう。反省してこい、ロリコン。

ともかく今の状況がわからないので、着替えを持ってきた女性研究員に話を聞いてみた。

まずここは学園都市にあるラボの一つだそうだ。

学園都市というのは超能力を科学的に研究、開発を行う都市のことらしい。超能力というのは、物理法則を捻じ曲げて超常現象を起こす力なんだそうだ。先程の電気のようなものや、他にも火や風を操ったり、瞬間移動なんて能力もあるらしい。

この超能力は学園都市で脳の開発を行うことで後天的に身につけられるのだという。

しかし能力は個々によって異なる上、必ずしも能力が身につくとい

うわけではない。

学園都市では、超能力を強度（レベル）で格付けしている。

レベルは0から5の六段階で分けられている。

無能力者、あるいは能力が弱すぎる者はレベル0に分類されるのだが、これは能力開発を行ったものの6割が該当するそうだ。

そして、レベルが上がれば上がる程、相対的に数が少なくなる。

ちなみに超能力者（レベル5）は、学園都市でも7人しかいないが、1人で軍隊と対等に戦える程の力を有しているらしい。

そのため、強い能力者や能力の種類に関しては運の要素が強い。

そこである計画が立案された。量産能力者（レディオノイズ）計画である。

超能力者（レベル5）の遺伝子配列のパターンを解明し、超能力者を生み出す計画だそうだ。

つまり超能力者のクローンを作成し、超能力者を誕生させるという計画である。量産されたクローンは軍用として利用されるのが決定済み。

人道？なにそれ美味しいの？のような非人道的計画なのだ。

そして、その非人道な計画こそこのラボの研究であり、クローンの第一号である検体番号０号――ミサカ００００００号（フルチューニング）こと俺なのだ。

……俺、終わったかもしれない。

第三話

衝撃的な話を聞いたあと、しばらく呆然としていたが、研究員たちはそれに構わず、頭や体に妙な機械を付け始めた。どうやら実験体である俺のなにかのデータを取るようだ。

正直実験体になるのはごめんだし、いっそのこと全部話すべきだろうか？実は俺は男なんだと。

……駄目だ！どうやっても廃棄処分やら解剖フラグな気がする！！仮にそれから逃れられたとしても、普通は信じてもらえないだろう。俺だって信じられないし。

そうこう考えながらなされるがままに数時間ほど検査をされ、その日は終了となった。

寝泊まりする部屋に連れていってもらい、夕飯？として渡されたブロック食をかじりながら、一人になって改めて今の状況を考えてみる。

学園都市は東京にあるらしいのだが、そんな場所は聞いたことが無く、超能力とか超常現象が一般的に存在するなんてのは、二十数年

間培った俺の常識にはない。

つまり、ここはアニメの世界のような異世界であるということ――。

となると親や友達と連絡をとるのは無理だろう。急に不安になってきた。

仮に外の世界に逃げたとしても頼れる相手がいないし、戸籍自体もないから生活のしようがない。

ただ異世界に来ただけならともかく、まさか実験体に憑依するなんて。どこぞの出来の悪いＳＦみたいな話である。

前に見た二次小説なんかだったら、最強な能力を持って俺ＴＵＥＥ出来ちゃったりするんだろうが……。

……待てよ。そういう意味では、この世界の七人しかいない超能力者（レベル５）のクローンなんだから、もしかして俺ってとんでもなく強いのか？

改めて電撃を放った手を見る。流石にもう光っていない。

どうやったら、電気を出せばいいのか――たしか女の研究員が超能力は自分だけの現実（パーソナルリアリティ）が重要であると言ってたっけ。

専門用語も混じってたからよくわからなかったが、ようは本来有り得ないことを有り得ることとして認識する――例えば俺の右手から電気が出て当たり前って考える事なんだろうか？

……妄想乙だな。意外と厨二には優しい世界なのかもしれない。でも、さっきは特に何も考えずに出来っけ。もしかすると感情は能力に影響を及ぼすのかもしれないな。

取り合えず右手に電気が集まるようにイメージしてみた。するとすぐに光りはじめ、電気を帯びはじめた。

「ぉおおぉぉ！なんかすげぇ！！」

思わず独り言をしてしまうほど興奮してしまう。超能力が使えるなんて男のロマンだよな！

少し希望が出てきたな。しばらくは実験体として生活して、まずはこの能力に慣れていこう。あくまで能力者の量産計画なわけだし、量産されるまではすぐに戦場やらに送られることはないはずだ、多分。最悪、レベル５の力があればなんとかなるかもしれない。

じゃあ寝るか。

洗面所で初めてまともに自分が憑依した少女の顔を見る。

……これはヤバいな。顔が整っていて可愛いいんじゃないか？幼さは感じるものの、それが相まって可愛らしさが増している。多分もう少し成長したら幼さが抑えられ、綺麗に感じるんだろう。くそ！出来れば男としてお友達になりたかった！！

……こういうのもナルシストと言えるんだろうか？複雑である。しかしながらロリコンや肉食系男子には気をつけよう。これは本気で貞操がヤバい。

……女の体になったが、いつかは男に惚れてしまうんだろうか？少し鬱になった。

洗面所から戻り、パジャマなんてものはないから、仕方ないので服を脱ぐ。にしても、どこかの制服なんだろうがなんで制服なんだ？

下着姿になり、寝に入ろうかとしたところで急に扉が開いた。

「００００００号！私に刃向かうとはどういうことだ！！お前はこれから再調整して……！！！」

……ああ、なるほど。一日のメはお前か白衣の男。裸を見た罪をあれで許そうとしたが、足りないというわけだ。負けたよ。お前は悪い意味でのロリコンの中のロリコンだ。

だからもっとすごい電撃を浴びせてあげよう。これが……俺の全力全開……ッ！！！！

騒ぎを聞き付けた研究員がまた駆け付けてきたが

「夜ばいされそうになった。恐怖で能力が暴走した。これは正当防衛である（キリッ」

当然運ばれていく白衣の男への視線は皆冷たかった。

第四話

翌日

今日も検査を行うらしい。ただ今日は定『身体検査（システムスキャン）』つまり能力の測定を行うようだ。たしかに自分の能力がどれくらいなのか知っておくに越したことはない。今は知ることが大事だ。

ついでにオリジナルになった超能力者の能力とかも見ることは出来ないか。と言うと能力測定後に資料を渡してくれることになった。

なんでもオリジナルの少女は幼い頃から様々な検査を行っているため、資料ならば膨大にあるらしい。だからこそ、その少女がオリジナルとして選ばれたという訳である。よりオリジナルに近いクローンを作るために。

測定後はある程度の自由は与えてくれるようだ。能力を自由に使っていいように訓練室も開放してくれるらしい。

もっとも自由に行き来できるのは、自室とそこだけで他の部屋の立ち入りは禁止されたが。嗚呼外出してぇ。

身体検査はまず電気の出力の測定から始めることになった。レベル5の全力を発揮すると、機器が故障するので徐々に出力を上げていくように指示される。白衣の男がいたが――何か言い足そうに苦

虫を潰したような顔でこちらを見ていたが無視した。

集中して出力を徐々に上げていく。研究員たちも、初めてクローンから能力を使っているのを見て感嘆の声が上がる。まあ実際見たのは白衣の男だけだしな。

「００００００号、もっと出力をあげろ」

白衣の男に言われ、また徐々に上げていく。このやり取りを何度か行った。しかしそろそろこちらは限界な気がする。能力使うのって意外に体力つかうのな。ちなみに白衣の男は天井と呼ばれていた。どうやらこのラボではかなり偉いヤツらしく、ヤツを中心し測定結果が出ているであろうモニターを覗き、研究員に指示を出している。

しかし体力はまだなんとかなるが、そろそろ出力の限界が近い。

「出力が限界みたいだ。これ以上出力を上げられない」

「何……？」

天井は訝しい目でモニターを睨む。

「バカな……。超電磁砲（レールガン）の１％ほどだぞ。どういう事だ？」

周りの研究員も騒然としはじめる。どうやら問題が発生したようだ。俺なにか間違ったことでもやったんだろうか？

「００００００号、身体検査を終了する。先の資料を受け取ったら自由にしていいぞ」

そのあとも色々なことをやらされたが、天井や他の研究員の顔が険しくなるばかりだった。なにがなんだかわからないまま俺は部屋をあとにした。

超電磁砲の１％――――天井の言葉が気になる。これがキーワードだ。

渡された資料に目を通す。そこには俺の顔そっくりの活発そうな少女の写真があった。

――――彼女の名前は御坂美琴。能力名は『超電磁砲（レールガン）』。元々は電撃使い（エレクトロマスター）なのだが、彼女が編み出した技を元に自らその異名を名乗っているらしい――――クローンである俺のオリジナルに当たる少女である。まさかオリジナルが厨二病を患っているとは。クローンの身としては嘆かわしい。

つまりレールガンとは兵器ではなく、彼女のことだろう。

ということは、今の俺の力はオリジナルの力の１％ぐらいということか?!おいおい俺ＴＵＥＥフラグがポッキリ折れたぞ!そのかわりに廃棄処分という名の死亡フラグが!!

待て、まだ慌てるような時間じゃない。素養はあるんだ。
能力を上げればいいんじゃないか？

資料にはオリジナルは元々レベル１の能力だったが、様々なカリキュラムを経てレベル５になったと記載されている。となると訓練次第では能力は上がるはずだ。

レベル５ではおよそ１０億ボルトもの電撃を放てるようだ。これの１％となると俺が使える電撃は１０００万ボルトか？ピカチ〇ウ越えたな。

てか、オリジナルは化け物か？某海賊漫画の悪役雷人間より凄いんじゃないか？

オリジナルのデータだと、だいたい俺の能力はレベル３に相当する。となるとオリジナルよりは早く上げられるかもしれない。

よし、早速特訓だ！存在価値を高めて廃棄処分は免れるんだ！！

第五話

訓練室はかなり広い空間だった。

まずオリジナルの能力がいくつか資料に載っていたので、レベル３でそれができるのか試してみよう。ちなみにいくつかは身体検査のときにやったしな。

まずは電撃の槍。高圧電流を槍のように飛ばす遠距離系の技だ。これはなんなくできた。射程に関しては、２０～２５ｍ程でそれ以上になると消えてしまう。威力も距離が遠ければ遠いほど下がるようだ。オリジナルは視界内すべてが射程範囲らしい。

落雷を誘発できるようだがこれは外でないとできないからパス。使うときになったら絶対ラ○デインって唱えてやる。

次に磁力の操作だ。電磁力を利用した技で、オリジナルは砂鉄で剣を作ったり、砂嵐を巻き起こした攻撃的な使い方や、一時加速、浮遊の移動手段としての使い方、レーダーのような空間認識など幅広い扱いが出来るらしい。

訓練室はそうした訓練も想定してか、幸い砂鉄やら鉄板も置いてあった。

磁力を利用した引力と斥力をやってみよう。まずは引力、鉄板が宙に浮き手に収まった。なんかスターウォー○でジ○ダイがライトセ

○バーをフ○ースで引き寄せるのを思い出すな。斥力も問題なくできた。

しかし砂鉄の剣は難易度が高いようだ。オリジナルは磁力線を目視できるらしいが俺はできないので、剣の形にするのも難しかった。

なんとかそれらしい形にしていざ鉄板を斬ろうとしても砂鉄の剣と鉄板が磁石のようにくっついただけである。表面を振動させることで切れるらしいのだが。そこまでの制御はどうやら無理そうだ。磁力線が見えればなんとかなるかもしれないが。一度、天井たちに相談してみるか。

砂嵐は簡単だった。ただ想像していたよりショボい。人が2~3人だけ入れるぐらいのつむじ風だった。視界を遮るのには役に立つのか？

次は加速を試してみる。磁石みたいに引力や斥力を利用することで実現できた。ただ一時的なのがなあ。緊急回避には便利だろうが常時使えないもんだろうか？こう身体強化的な。

あ、そういえばあったぞ、漫画の技だけど。たしか某狩人×狩人で暗殺一家の三男が使ってた技だ。末梢神経を電気で操作して速度や反射速度あげたりしてたっけ。やってみるか。

……複雑な神経を操作するためかなり制御が難しかったができた。今なら小足みて昇竜余裕な超反応をリアルでできるだろう。ただ課題としては制御が複雑なため攻撃を同時に行ったり、磁力利用の移動の併用は無理みたいだ。しかしこれは使える。ありがとう暗殺一

家の少年よ。これで俺はまたひとつ強くなれた。漫画・アニメの技は参考になるかもしれない。くっ、燃えてきたぜ俺の妄想力が！いつか全部実現してみせる！

浮遊は広い空間のこの場では試せなかったので磁力を利用した壁登りをやってみた。気分は蜘蛛男である。しかし、スカートが短いせいでパンツまる見えだな。スパッツかなんか買ってもらおう。俺は痴女じゃないし。

他のオリジナルが使用する能力については、今日はやめることにした。例えば誘導加熱による加熱――いわゆるレンジでチンするアレだが鉄板とかやったら危ないだろうし、レーダーやパソコンのハッキングなんかは対象や機器がないとできないので天井たちに許可を得ないと必要があるからだ。

最後にオリジナルの異名ともなった超電磁砲を試してみる。これはレベル５ではじめて使える技のようだから、できない可能性が高いが。

超電磁砲はコインを弾丸として用い、指で弾く形で撃ち出し音速の３倍以上で放つ。軌道上にある物を全て薙ぎ払うという恐ろしい技だ。空気との摩擦熱でコインが溶けてしまうため射程距離は５０ｍとそれほど長くないが、弾丸の質量を変えれば威力や射程を伸ばすことができるらしい。実際の硬貨を使ったら、貨幣損傷等取締法に引っ掛かる技だな。人にむけて使う技では絶対にない。

で試してみたのだが。コインを飛ばすことは出来た。普通に飛ばすよりは強いだろう。辺り所が悪ければ、気絶ぐらいはできそうである。しかしコインは溶けないし、速さも音速を越えた気はしない。これなら電撃の槍か銃のほうが強いだろう。

一通り技を試し、復習しようとしたところ電撃が出なくなった。焦ったがどうやら電池切れという現象のようだ。ゲームによくあるＭＰがきれた状態なのだろう。休憩すれば時間とともに回復するらしい。

仕方がないので、普通に身体を鍛えることにした。オリジナルは能力も凄いが、身体能力や知力も凄いというパーフェクトな存在なんだとか。それらの要素も能力向上に関係しているようだし、軍に回されるかもしれないから体も鍛えないと。勉強に関しては天井たちと相談だな。どういった知識が必要なのかわからないしな。

やることは多いが生き残る為に頑張るぞ……。

第六話

一週間過ぎた。

目が覚めても、元の世界に戻るなんてことはなく、慣れない日々を過ごしている。両親は元気にしているようだろうか？あなたがたの息子は少女になって今料理してます。

きっかけはこちらの世界にきて三日目のことだった。それまで出てきた食事が全てブロック食である。なんだよ、プレーン↓チョコ↓チーズ↓フルーツって！ループに気付いた時、流石にキレて天井（ちなみに名前は亜雄）に電撃かましてやった。

で交渉した結果、調理場（なんでラボにこんなのがあるんだ？）を借りて料理することになったのだ。料理ができるなら、今後自由に調理場を使用できる許可と買い物限定の外出許可付きで。天井は料理できるように調整していないからできるわけがないと高をくくっているようである。

だがしかし、元の世界では学生時代から一人暮らしをしていたこともあって多少なりに料理はできるのだ。完成した料理を見て呆然とした天井に思わずドヤ顔したのも悪くはないだろう。

出来も悪くは無かったので、食べるか？と天井に聞いたところ、天井は人形が作ったものを食えるか！と捨て台詞を吐いて去っていった。あの野郎。いつかあいつのパソコンにＩ　ｌｏｖｅ　ｌｏｌｉｔａって壁紙に変えてやる。

実のところ、俺が人形扱いされるのはなにも天井だけではない。ここにいるほぼ全ての研究者は似たり寄ったりな認識のようである。前の夜ばいの件も少女に手を出した天井は変態であるというよりは、人形にまで手を出す天井は異常性癖者であるという認識なのだ。まあ、どちらにしても天井は変態なわけだが。

まあそんな訳で、あまり深く関わることがない。必要最低限しか話さないし、名前を覚える機会がない。

……正直に言うとかなり凹んだ。人間扱いされないことに。友達も出来ない。ひどく孤独なのだ。量産型能力者計画が進めば、同じクローンの子が増えるのかな？そうなると俺から見れば妹みたいな存在になるんだろうか。そいつらにはこんな孤独な気持ちは味わせたくはない。なるべく優しくしてあげよう。姉として。

なお、天井は違う意味でぼっちである。研究者としては一目を置かれているものの、あまり好かれてはいないようだ。この間も研究員たちが互いに誘い誘われ食事に向かう最中、一人だけ誘われてなかったし。少しだけ俺の憐憫を誘った。

かなり話しがずれたが、まあそんなわけでひょんなことから外出許可と料理する権利を得たのである。

それから、身体検査は順調だ。徐々にではあるが、電撃の出力は上がっている。天井も何故クローンがレベル５にならないのかは疑問

に思っているようだが、能力向上の結果は喜んでいるらしい。能力が強いと脳の演算処理が早い、つまり頭がいいということを聞かされ、憑依した俺の知能の問題かとも思ったが、どうやら別問題のようだ。

訓練や勉強に関しても順調である。訓練は漫画の電気や雷を使う技を思い出しながら試してみたり、前回試せなかった能力に関してもやることができた。

勉強に関しては、実は洗脳装置（テスタメント）と呼ばれる装置で、既にオリジナルと同程度の知識を有しているらしい。軍事利用も考えているため、銃の使い方なんてのも学習済みなんだとか。んなバカなと思って英語の本を見ても普通に読めるし、訓練室で射撃も出来た。洗脳装置すげえ。元々の０００００号の人格も洗脳装置で天井が調整していたものだそうだ。ただ今の０００００号の人格にはならないはずだと、首を傾げていたが。……まあ、普通憑依するなんてのは気付かないよな。

そんなこんなしていると瞬く間に一週間過ぎたのである。

朝食を済ませたあと、検査が始まる。これは日常のスケジュールと変わりない。ただ今日は一つだけ違うことがあった。見知らぬ女性がいる。誰だろうか。

ウェーブのかかった黒髪のギョロっとした目が特徴の若い女性だ。こういってはなんだが暗がりで見かけたら、心臓に悪いかもしれない。視線があったので軽く会釈した。

「ｐｒｏｂａｂｌｙ、あなたが０００００号かしら？」

「ああ、そうだがあんたは？」

「布束砥信よ。よろしくね」

「ああ、よろしく」

ここに来て、初めて挨拶らしい挨拶を交わしたので、ニッコリと笑いかける。一瞬、いきなり英単語が出たのでお前はルー〇柴かとツッコミたかったのは内緒だ。キャラ作りに悩んでいるのかもしれない。安心しろ、外見は立派にキャラが立ってるから。でも気にしてるかもしれないから黙っておこう。

布束砥信は、あらためてこちらに笑顔を向ける彼女――――００００００号のことを考える。

（本当に感情が豊か――――。Ｂｕｔ、これはどういう事？）

本来天井亜雄が施した人格調整では、従順で大人しく感情が表に出ない人形のような性格になるはずだ。元々、彼女は洗脳装置の監修をしていた実績を買われ、この計画に参加した外部スタッフだ。その彼女から見ても、天井の調整に問題はなかった。だが００００００号は全く違う結果を見せている。

（本当に作り物なの？これではまるで――）

布束は頭に過ぎった言葉を掻き消した。それを認めてしまえば、研究の根幹を問うことになる。

そんな事を考えながら、ただ彼女を見つめ続けた。

第六話（後書き）

布束砥信さんの口調は難しいですね。

第七話

ギョロ目ちゃん事、砥信さん――外見では自分が年下だからそう呼んでいる、とはよく話すようになった。外見だと年が割と近かったし（高校生らしい）、礼儀には煩い人だけど意外と話しやすかったりする。砥信さんはその歳で洗脳装置の開発に関わったスペシャリスト。その関係で、量産型能力者計画の妹達（シスターズ――クローンの総称）の人格調整を担当しているらしいんだけど、元々の計画のメンバーではないため、天井からはいい顔はされていない。

「砥信さん、砥信さん、お昼一緒に食べない？」

「ええ、いいわ」

今では昼食も食べる仲だ。

「Ｗｅｌｌ、明日他の妹達が完成するのは聞いてる？」

「え？いやまだ聞いてないよ」

そうか、とうとう他のクローンが生まれるんだ。どんな子なんだろうな。

「Ｉｎｃｉｄｅｎｔａｌｌｙ、この研究所で５体、他の研究所でも１０体以上造られる予定よ」

「え、他の研究所でもこの研究やってるの?!」

「ええ、様々なデータの収集は必要。ｂｅｓｉｄｅｓ、計画終了後のことも考えての事よ」

つまり軍事利用のための量産体制の下地も整えておくって事か。

「誕生する瞬間とか立ち会ってみたいなあ」

「それは天井に聞かないとダメね」

あとで天井にダメ元で話したら、すんなりと許可を得た。なんか機嫌がよかったみたいで、こぼれる笑みを隠しきれていなかったし。なんでだ?

培養液と思われる液体が詰まったポッドが沢山並んでいる。そこには同じ顔した少女たちがいた。中にはまだ俺より幼く見える子や赤ん坊みたいな子もいる。

「よし起動しろ」

天井の号令とともに液体が排水され、ポッドが開く。すると全裸の少女が重力に負けてかペタンと座り込んだ。しばらくは呆然としていたが意識がはっきりしだすと、状況を理解出来ないのか、キョロ

キョロと辺りを伺う。

か、かわいい……！！！！なんだこの生き物！！！！！パネぇ、妹達パネぇ！これを軍事利用とかありえないだろ、常識的に考えて！！

そう興奮していると、少女はワンワンと泣き始めた。仕草だけみれば完全に赤ちゃんである。

少女は研究員たちとともに別室に連れて行かれる。恐らく、洗脳装置による学習や人格調整を行うんだろう。作業は翌日までかかるようだ。１日かかるとはいえ調整って意外と早く終わるんだな。

翌朝目が覚めると、なにかがおかしい。誰かに見られているような、何かが繋がっているようなそんな不思議な感覚だ。流石に異常かもしれないと思ったので天井に相談した。

「ああ、それはミサカネットワークのことだろう」

「ミサカネットワーク？」

「脳波リンクのことだ。妹達は全員同一の脳波であり、能力も電気操作能力だ。これを利用して、脳波を電気信号として発信し、意識や思考、経験などの情報を共有できる。ただし許可した情報であればな。理論上では、記憶のバックアップや演算の並列処理なども可能なはずだ」

なるほど、ようは妹達内限定のインターネットってことか。というか、こんなにできる天井を見るのは初めてだな。

「ネットワークを利用した会話もできるはずだ。すでに検体番号５号までは稼動している。試しておいてはどうだ？」

なるほど、んじゃ早速。

――――あー、テステス。こちら００００００号。聞こえていますかー？

（こちらは検体番号１号です、とミサカは応答します）

（こちらは検体番号２号です、とミサカは応答します）

（こちらは検体番号３号です、とミサカと応えます）

（こちらは検体番号４号です、とミサカは返事します）

（こちらは検体番号５号です、とミサカは返事します）

……この口調は妹達内で流行りなんだろうか？調整の影響かな？

――――ミサカネットワークのテストで会話してみただけなんだがな。まあ何かあったら連絡しようぜ。あとで直接会えるやつもいるだろうけど、今後ともよろしくな。

（『よろしくお願いします、とミサカはお願いします』）

ネットワークに問題はなさそうだ。

「問題なく会話できたよ。そういえば他の妹達は？」

「これから身体検査中を行う。お前もついてこい」ようやく、妹達と直接対面できるのか。やったね００００００号、家族が増えるよ！

外見も服も同じ。びっくりなほど見分けがつかない五つ子が検査室にいた。ミサカネットワークのおかげで各人の検体番号がわかるので識別できるが、無ければ見分けられる自信がないな。それにしてもみんなして無表情だな。

「よぉ、俺がさっき話した００００００号だ。改めてみんなよろしくな」

『よろしくお願いしますとミサカは答えます』

ぺこりと無表情で頭をさげる妹達。かわいいけど、あまり感情を表に出さないんだな。はじめての顔あわせで緊張してるのかな。ちょうど傍にいた砥信さんに耳うちしてみた。

「砥信さん、あの子たち緊張してるのかな？さっきから無表情だけど」

「緊張？有り得ないわ」

え？有り得ない？

「そもそも喜怒哀楽などの感情は全て妹達にはないわ。元々感情は洗脳装置の調整に含まれていないもの」

え？じゃあそれって？

「妹達は感情がない。……人とは違うのよ」

その一言はずきりと胸に響いた。

第八話

あれから砥信さんとは余り話していない。話していると気まずくなってしまい、どちらかが会話を終わらせるからだ。

聞いた当初は、砥信さんも他のやつらと同じように俺を含めたクローンを人間のように思ってないのかと絶望した。知り合って一ヶ月も経ってないけど、友人だと思ってた人の一言はそれだけ重かったのだ。

しかし今は落ち着いたので、冷静に考えることができる。今までの砥信さんと話しをしてきた感じは、少なくとも他の研究者たちとは違うものだったはずだ。だからあの言葉はむしろ……。

けれどそれを肯定できるだけの確証がない。聞けばいいんだろうが、正直いうと怖かったりするのだ。否定されるのが。俺や妹達は人じゃないと言われるのは。だから悶々とした日々が続いている。

そんな悶々とした気持ちは関係ないとばかりに、ミサカネットワークは徐々に賑やかになってきている。

この研究所では見かけないが、他の研究所でどんどん妹達が誕生しているようだ。今確認しているだけでも５０人を越えている。確認される度に挨拶をネットワーク経由で送った。他の妹達も挨拶したり頻繁にネットワークを利用しているようだ。

うちの研究所にいる妹達を見る。このところよく一緒になるようになった。

相変わらず無表情で、笑ったりすることはない。一緒に訓練してみたり、料理を手伝わせてみたり、食べさせてみたりするがあまり反応はない。何かを食べたとしても美味しい、まずいといった感想は出るのだが、あくまで淡々としている。

砥信さんのいうように感情という概念は本当にないんだろうか？妹達にも聞いてみたが結果は砥信さんと一緒だった。だが自分にはどうしても信じられない。

どちらかというと、感情がないのではなく育っていないだけなんじゃないかと思うのだ。赤ん坊の頃は泣くか笑う――それだけじゃないけど――といった、単純だがはっきりとした感情を表に出しやすい。だが、人は成長すれば色んな経験を経て感情はより複雑になり、抑えられるようになる。

妹達にはそう言った経験がない状態で成長させた。だから感情は抑える部分だけがいびつに成長してしまい、それが弊害になって感情が育っていないのかもしれない。まあ、これは全て憶測に過ぎないが。

幸い妹達は好奇心が旺盛だ。昨日も料理の仕方を学習してたっけ。うまくいかずに焦げた物体を食べたりしたけど。

知識はあるが経験はない。それはそうだ、中には昨日生まれたばかりの子もいるのだから。だから、きっと時間が経てば感情が芽生えるはずだ。

計画が終了する前には感情が芽生えて欲しいな。そして砥信さんや他の奴らに俺を妹達の事を認めてもらうんだ――妹達は人として生きているんだって。

人して認められたら、研究者たちも今の計画について思い直してくれないだろうか。そんな飛躍した考えが頭を過ぎる。量産型能力者計画の計画を軍用じゃなくて平和的な利用に変えてもらいたいのだ。

例えば、学園都市内の警察みたいなものに協力するとかいいんじゃないか?学園都市は超能力者ばかりだし、悪用するやつだっているだろう。だからきっと学園都市には警察のような組織が存在するはずだ。そこに妹達全員雇ってもらうのである。

電撃なら相手を傷付けずに取り押さえれるし、ミサカネットワーク使えば犯人追いかけるのに役に立ちそうだしな。

まあその考えは飛躍しすぎか。実現は難しいかもしれない。けれど、研究者があるいは軍関係者が、妹達を人として見てくれたら、人形として扱われるよりも、危険で粗雑な扱いをされにくくなるだろう。

そんな日がくればいいな。そう切に願った。

けれど、俺達を取り巻く状況は嘲笑うかのように急変するのである。

第九話

０００００号ですが、研究所の空気が悪いです。

何故空気が悪いのか。それは研究が芳しくない――というか問題が発生したからである。問題とはなにか？それは妹達の能力のことである。

妹達の能力は身体検査の結果が、レベルは3または2であったからだ。（ばらつきに関しては個体差があるらしい）

元々俺に関しては完全な試作品、つまりクローンを生産するに当たり不備や不具合がないかどうかを確認することが意味合いが強い実験動物だったそうだ。

そのため、レベル5として生まれてこないという問題は発生したものの、クローンを生み出す理論は確立したので、あとは問題を分析し解明すればいいだけの話である。オリジナルや俺の検査結果を比較し、不具合の原因と思わしきデータを調整し直す。そんなフィードバックを繰り返せば、妹達はレベル5として生まれるはずだった。

だが結論はレベル5にならなかった。想定される不具合を全て修正した上、５０体以上もの素体で試したものの、当初の想定とは違う結果を見せたのである。計画の進行が停滞してしまったのだ。

そのため研究員たちは険しい顔をしているし、天井も上司への経過報告などで忙しいらしい。

ここでもしクローンがレベル5になれないと言うことが確定したら、

量産型能力者計画は凍結し、俺達の廃棄処分は覆せないだろう。

残る可能性は能力の成長だ。オリジナルがそうであったようにクローンもまたそうでは同じなのではないか。

この間俺はようやく身体検査でレベル４と診断された。そもそもオリジナルが成長できたから、成長できるのではと軽く考えていたが、レベル３からレベル４にシフトするのも成功例は少ないそうだ。ただその結果、オリジナルのようにカリキュラムをこなせばレベル５になれるのではないかという可能性が強まったのである。

後天的な学習で成長が可能ならば、軍事利用で考えれば即戦力にならないのは問題になるかもしれないが、レベル５は７人までしかいない希少価値も考えると十分に検討に値する。

まあ問題がないわけではない。

それはレベル５に到達するまでに要する時間だ。ちなみにオリジナルでもレベル４からレベル５になるのに年単位で時間を要しているのだ。それ以上かかる可能性がある。

それに妹達が個体によってレベル５に到達できない可能性もある。量産型能力者計画は偶発の産物であるレベル５を確実に生み出し量産する事が前提だ。これが偶発となると話しが変わる。

そもそも理論が崩れた以上、本当にレベル5になれるのかどうかも不明なのだ。

できるかできないかわからない事のために何年も費やす事は難しい。研究にも資金が必要だ。できない可能性の高い研究は凍結されるだろう。

だが、なにか確証となるものがあれば別である。

学園都市にはそれを可能にするものがあった。それが樹系図の設計者（グラム）だ。

これは正しいデータさえ入力してやれば、完全な未来予測（シミュレーション）ができるという超高性能コンピュータなのだ。樹系図の設計者が弾き出した結果は学園都市内で確定事項となるため、クローンがレベル5になれるとなれば、研究の継続は確定する。

樹系図の設計者はすぐに使えるわけではない。使用権限は学園都市の上層部の許可が必要になる。そのため天井は上司を通じて随分前から申請していたようで、すでに研究データを渡しており、あとは結果待ちである。

「というわけです、とミサカは簡潔に説明します」

「ふむ成る程な」

ちなみに今までの説明はミサカ1号たちと俺が情報を補完しあってまとめてくれたものである。

今までわからないことは砥信さん経由で聞いていたが、砥信さんとはまだ仲直りできてないし。あ、なんだか悲しくなってきた。

「何と言うかまじでやばい状況なんだな」

「計画が凍結しても、他の計画に召集される可能性もあるのですぐ様廃棄処分はせず、培養器で保管されるだけではないでしょうか。もっともそのまま処分される可能性もありますが、とミサカは推察します」

寝てたら処分か。うわ、まじで怖いわ。想像して身震いするくらい。みんなは自分が廃棄処分されることについてどう思ってるんだろう。

「怖いこというなよ、3号。お前達は廃棄処分が怖くないのか？」

「００００００号、前にも言いましたが、妹達に感情という概念は存在しません。だから怖いと言う意味は知っていても理解はできません、とミサカは物覚えの悪い００００００号に呆れながら答えます」

……たまにこいつら意地悪だ。砥信さん洗脳装置で悪口をインストールさせたんだろうか。

「000000号は何が怖いのですか、とミサカは首を傾げながら尋ねます。そもそも計画が凍結した場合、私達の存在意義も失われるのですから処分は最善であります、とミサカは述べます」

存在意義か。

「そりゃ死ぬんだから怖いに決まってる。死ねばやりたいこともできないだろ」

「やりたいことですか？とミサカは疑問を投げ掛けます」

「おう、自由に外出できないから、自由に外にも出てみたいしな。買い物のみしか出られないから、学園都市の一部しか知らないし」

学園都市は他の都市と比べて数十年先を進んでいる最先端の都市なんだとか。きっと珍しいものがありそうだ。

「それに計画だけが全てじゃないんじゃないか。だいたい存在意義が無くなったら死ぬ殺すなんてのもおかしいだろ。その理屈でいけば天井たち研究者だって研究できなくなったら、処分になるぞ」

「ですが彼らは人です、とミサカは反論します」

彼女たちも、人と妹達は違う生き物と考えているようだ。だが違いってなんだ？

「じゃあ聞くが４号、俺達と天井たちとの違いはなんなんだ？感情の有無か？クローンだから違うのか？感情や生まれだって人それぞれ違うだろ。だったら大差ないんじゃないか、俺達は」

「やはり０００００号は変わっています、とミサカは正直に伝えます」

妹達はそう答えながら、少し何かを考えているようだった。

本当はもっと時間が欲しい。彼女たちが考える時間を。けど、それには時間が足りない。このまま停滞して時間が稼げればいいんだが。

そんな願いも虚しく、樹系図の設計者の結果が出たのは数日後のことだった。

その日、量産型能力者計画の凍結が決定した。

第九話（後書き）

次話辺りから徐々に独自設定やら乖離が多くなっていくと思います。

第十話

1．妹達の能力は『欠陥電気（レディオノイズ）』である。レベルは3または2（個体差による）であり、それ以上進化できない。

2．００００００号のみレベル5に進化できる。レベル5に進化するには、超電磁砲がレベル5に進化したカリキュラムで１５年を要する。

3．０００００号及び妹達の耐用年数は１０年であり、レベル5に進化することは不可能である。

上記の結果から、量産型能力者計画は実現不可であり、計画を凍結する。

これが樹系図の設計者から導き出された予測演算を元に上層部が下した結果だった。

「理論に問題は無かったはずだ！だが、何故ダメなんだ！」

研究を主導していた科学者――天井が叫ぶ。

妹達がレベル５になれないと、計画の凍結が決定した日、研究者たちは多いに荒れた。

学園都市が誇る最高の超能力者。それを量産できる偉業。都市内でも一流の科学者たちを集めた計画。成功するはずだった。科学者として後世に遺る偉業をなしとげ輝く未来になるはずだった。

だが結果は欠陥だらけの能力者を生み出しただけ。こんなガラクタならば学園都市には吐いて棄てるほどいる。

唯一の成功例も進化する想定していた耐用年数を越えた年数が必要になる。これでは成功例とは言いづらい。しかも元々試験体で造られた素体が成功例だなんて、飛んだお笑い草だ。

故に心は荒む。そしてそれを晴らす矛先を探す。欠陥の烙印を押された少女たちが選ばれるのに時間はかからない。研究対象であるため直接手を上げるものはいなかった。しかし、出来損ないや欠陥品と口汚く罵る言葉は全て少女たちに向けられる。

そんな悪意に包まれた中、その言葉すら届かない少女がいた――――０００００号のことである。

計画凍結したと同時に余命を宣告された０００００号です。あはは

ははははは、なんだこれ、もう笑うしかねえ。

絶望した！この世界の厳しさに絶望した！

非人道な計画、軍事利用、廃棄処分、最後は寿命短いとか死亡フラグ乱立しすぎだろ！この世界はどんだけどSなんだよ、バフ〇リンだって半分は優しさで出来てんぞ！！胃腸に優しい成分だがな！！！もっと命大事にして下さい！！！！あまりの酷さに錯乱したじゃねえですか！！！！！

あー逃げ出そうか、こんな所。廃棄処分も考えられるしな。

よし、こんな時はミサカ会議だ！――――説明しよう！ミサカ会議とは、ぶっちゃけミサカネットワークを使った妹達との会議である。

議題はみんなで研究所から脱走するか否かだ。

投票結果
賛成　１
反対　５０

圧倒的……ッ！圧倒的否決ッ！！

以下、主だった妹達の反応。

「ミサカネットワークに存在する限り、居場所はすぐ見つかります、とミサカは無知な００００００号に忠告します」

「００００００号は能力が強いので成功する確率は高いですが、他の研究所は警備員に捕まる可能性が高いです、とミサカは妹達を見捨

てる０００００号の非情さに感心します」

「そもそも逃走後の計画が不明瞭です。戸籍も無しに生活は出来ません、とミサカは計画の無謀さを指摘します」

フルボッコである。妹達は手加減を知りませんね。お姉ちゃん悲しいです。

その日、俺は枕を涙で濡らした。

計画凍結になると、研究所は機密保持のため閉鎖される。しかし研究に使われた器材の片付けや資料の整理があるので、すぐには閉鎖されなかった。片付け作業には俺や妹達も狩り出された。

だがそれも長続きはしない。次の研究が決まり研究所をあとにする者も増え、次第に研究所は閑散となっていった。

ミサカネットワークで所在のわかる妹達も徐々に確認が取れなくなっていった。閉鎖中は次の研究が決まるまで全ての妹達は培養器に保管されるせいだ。もう今は二桁をきっている。うち五人はこの研究所の妹達だから、もう他の研究所もほとんど閉鎖したのだろう。

今日は砥信さんが研究所を去る。……もう会えなくなるかもしれないから、最後くらい仲直りして別れよう。

「砥信さん」

声をかけると、彼女が振り返る。ちゃんと顔を見るのはいつ以来だろう。

「お疲れ様でした。色々お世話になりました」

ぺこりとお辞儀する。最後くらい礼儀正しくいこう。始めの頃は目上だから敬語にしろと言われたが、天井ですら敬語じゃなかったので彼女が折れたのもいい思い出だ。

「……」

彼女はなにも答えない。

「じゃあ、さようなら」

その場をあとにしようとした時、

「待ちなさい」

砥信さんが呼び止めた。

「私は今でも妹達は感情がないと思っているわ」

――息がつまる。

「ｈｏｗｅｖｅｒ」

砥信さんは少し微笑んで

「いつか感情が芽生えると思うわ」

そう言ってくれた。

「どんな研究になるかわからない、ｎｅｖｅｒｔｈｅｌｅｓｓ、必ずまた会いましょう」

もちろん俺の返事は笑顔で

――――ああ、またな。

培養器に入る。保存液に浸かるまで妹達と話した。今度起きる時までにやりたい事見つけろとか、本当に取り留めのない話しだ。保存液が満たされていく。徐々に意識が保てなくなる。

今度起きる時は砥信さんが妹達を人として……見てくれる。妹達も……きっと感情が芽生えて……人として……生きるだろう……。次起きる時は……きっと……幸せに……。

第十話（後書き）

とある科学の完全調整・完

次回の０００００号先生の活躍にご期待下さい！

いやもうちょっとだけ続くんですけどね。

第十一話

研究所の一室。一人の男が黙々とキーボードを叩く。

部屋の主が神経質な性格の為か、膨大な書類があるにも関わらず、机上は整然としている。その書類に目を通しながら、ただひたすらにキーボードを叩いていた。無機質だがやけに規則正しい音が部屋に響く。入力を終えたのか音が止み、男――天井亜雄はモニターに視線を移す。

そこには「超能力進化（レベル５シフト）実験計画書」と表示されていた。

量産型能力者計画が凍結して早一ヶ月が過ぎた。

非公式な実験ではあったが、学園都市の一部の科学者では非常に注目された研究内容だった。結果は失敗だったが、クローン技術の確立、そして妹達と成果物もある。

そのため計画を再利用できないか様々な検討がなされた。そして二つのプランを実施することが決定した。

その中のプランの一つ。それが「超能力進化実験」である。

内容は決して公表できるような代物ではない。しかしこれらのプラ

ンが成功すれば、量産型能力者計画など及びもしない名声を得られるだろう。

だが、今回は前回のような失敗を重ねる訳にはいかない。そうなれば学園都市での研究者としての地位は失われる可能性が高い。

計画に穴がないかどうか確認するため、何度も何度もモニターに目を通す。

前回の計画は、妹達が欠陥品であると特定されるまでに、時間がかかってしまった。計画の事前に樹系図の設計者が使えれば早期に計画の失敗がわかったかもしれない。しかし妹達の実測した能力データが無ければ、そもそも樹系図の設計者が演算できなかったのである。

だが、今回は違う。前回の結果を元にして、事前に樹系図の設計者の予測演算も行っているプランだ。実験が失敗するはずがない。

勿論、だからと言って対策を取らないわけではないが……。天井は前回の計画から非常に慎重になっていた。もう後がないのだからこそ、万全を期す。

夢を見ていた。憑依する前の子供の頃の夢。

当時小学生だった俺は、この頃は余り人と話すのが得意じゃなかった。それが特別親しい友達なんていなかった。それが災いしたのだ

ろう。つかず離れずいた距離が次第に離れていく級友。いじめに発展するのはその距離が無視できないほど広がっている――そう自覚した時だった。

最初はいわゆるからかいの対象だった。次第にエスカレートし、所謂いじめのテンプレートな展開で物が無くなる、暴力は振るわれる、距離を置かれる、陰口を聞こえよがしに叩かれるだ。そして最終段階はいなかったことにされる――存在を否定された。級友や担任からすら。

早い時点で親に相談していたらよかったのかもしれない。だが、それより先に心が折れてしまったら、反抗する意志すら無くなってしまったらあとはされるがままだ。まずいじめる側は、反抗する意志を潰しにかかる。

子供が考えつく、できる対応なんてたかが知れている。親に話すか先生に相談するかだ。親に話そうとすれば暴力で脅され、担任はいじめが存在すれば責任を負わされるため、見て見ぬフリをする。休み続けるには、転校するには親に理由を言わなければならない。どんどん追い詰められていく。周りから無視され、自分は無価値で生きるべきではなんじゃないかと思ってさえいた。

幸い俺は他の教師がいじめに気付き、親が助けてくれ、そのまま転校となった。

さらに幸運なことに次の学校で友達ができ、親と友達に支えられたから立ち直ることができた。

あの頃の自分と妹達はある意味似ている。周りから人扱いされないところ、計画が凍結し、実験体の立場がなくなったことで処分されても構わないと自身の価値を蔑ろにしているところとか。だから彼女達をなんとか変えたいのかもしれない。あの頃助けてくれた人達のように。

だから変えるんだ。

少し光を感じる。次第に眩しく感じて意識が覚める。どうやら培養器の中だ。……処分はされなかったらしい。

培養器の扉が開き、表にでる。ニヤニヤと笑う白衣の男。培養器は保護液で満たされていたので当然俺は裸。

ああ、なんか凄い既視感。取り合えず一回殺っとく？

「また私に電撃を放つとは！相変わらずお前は変わらないな！！」

「いやさ、少女が裸でいてさ、目の前にニヤニヤしてる男がいてみ？どうみても変質者だって」

想像したのか天井は顔が引き攣った。まあ気絶するほどやらないように手加減したから勘弁してくれ。

「で、俺を起こしたってことは新しい実験が決まったってことだよな。妹達も実験に参加するのか？」

手加減した理由はこいつに事情を聞くためだ。引き攣ってた顔が綻ぶ。よくぞ聞いてくれたって表情だな。わかりやすいぞ。

「ああ。超能力者進化実験という実験だ。妹達も使ってな」

「聞く限りでは、能力をレベル５に進化させる実験みたいだが……、俺達は進化できないんじゃなかったのか？もしかして、寝ている間に進化できる技術でも出来たのか？」

そう、進化できないからこそ以前の計画は失敗したんだ。もし進化できるなら、その前提が崩れることになる。

「流石に計画が凍結してまだ一ヶ月しか経っていない。新技術はまだ確立されていないさ」

じゃあどういうことだ？進化する方法が思いつかない。理解できていない顔に天井は心底満足そうだ。いるよな、こういう奴。

「進化させるのはお前だ。樹系図の設計者はお前のみレベル５に進化可能と演算しただろう」

「いや、たしかにそうだが寿命が１０年しかないんだろ？仮に寿命を延ばしても、実験に１５年もかけられるのか？」

「そこで妹達を使う」

妹達？なんでここで出てくる？

「まだわからないか？ミサカネットワークだよ。ミサカネットワークを使って、レベル５が受けたカリキュラムを妹達にも受けさせる。そしてその経験をお前に共有させたらどうなる？」

……！なるほど！ネットワークで経験値を積むのか。たしかに時間を大幅に短縮できるかもしれない。だが……。

「それでも、５０人じゃ時間はかかるんじゃないか？寿命までには届きそうだけど。単純にカリキュラムを分割しても５０人じゃ……」

「２００００だ」

は？

「２００００の妹達を使って、お前を進化させる。それが超能力進化実験の実体だ」

な、なんだってーーー！！！？？？

第十二話

な、なんだって―!!!???

２００００人の妹達に経験を積んでもらい、ミサカネットワークからその経験を共有、経験を蓄積し、００００００号をレベル５に進化させる――超能力進化実験というトンデモ計画に思わず叫び声をあげた。

なにその「時間が無ければ人を増やせばいいじゃない」な発想は！いいのか？そんな強引なパワーレベリングは！

一瞬、某忍者漫画の影分身での修業風景とか、とある馬車の武器商人が馬車の中にいるだけでレベルがカンストした風景が頭を過ぎった。

ああそういえば忍者漫画で某上忍は雷技使ってたな。あれ今度真似しよう。……じゃなくて。

「キバヤ……天井、しかしそんな無茶苦茶な実験は本当にできるのか？それに２００００人は予算的に大丈夫なのか？」

とかく研究にはお金がかかるのだ。妹達一人を生み出すのに１８万円かかり、さらに衣食住にもお金はかかる。２００００人ともなると１日だけでも相当な額になるだろう。さらに研究所の維持、科学者や警備などの人件費など雑費も考えると想像もつかない。

「ああ。今回は樹系図の設計者で事前に演算したからな、間違いないはずだ。統括理事会の承認を得て、予算も十分にあるさ」

成る程、樹系図の設計者で演算された結果は確定事項のようなものだ。だから上層部も一度は失敗した計画の再利用を決定できたのか。天井の顔も自信に満ち溢れているな。

もし、この実験がまた非人道的な実験だったら、流石に抵抗するつもりだった。しかし聞く限りでは命を失ったり、軍事利用される内容ではない。流石に１９９５０人もの妹達を実験の為に新たに生み出すのは気にかかるが。

だが生活するとなると、実験を受けるしかない。新たに生を受ける彼女達と一緒に。前の実験ではできなかった妹達の感情を芽生えさせ、周りから人して扱ってもらうって目標もやりたいしな。

憑依する前だったら、クローンに漠然とした忌避感があったが、今は違う。どうやって生まれたかは選びようがないものだ。むしろこれからどう生きるかが問題なのだ。

だから実験を受けることにした。

「そう言えば、砥信さん……布束さんはこの実験に参加しているのか？」

砥信さんとの約束。できれば叶うといいんだが。

「残念だが、彼女はこの研究には参加していない。そのかわり優秀なスタッフはたくさんいるがね」

そう……か。まあいつか会えるだろう。約束したもんな。

「ああそれから、０００００号、これを渡しておこう」

ややゴツいゴーグルを渡される。なんだこれ？視力はやたらいいほうで視力矯正は必要ないなんだが。

「これは電磁波を視覚化できるゴーグルだ。以前、お前がオリジナルの能力との差異について指摘しただろう。進化するまではそれでスペックを補う」

研究のための新装備！そういうのもあるのか！電磁波見れるようになったら、また能力が増えるかな？うーん、一度考えんとなあ。

「それからお前は、こちらが指示したカリキュラムを行ってもらう。ミサカネットを使ってはあげられない肉体的な刺激、薬物投与などのカリキュラムを優先するがな。その間に二万の検体を造りだす」

――そして実験は始まった。

まず手始めに行ったことは、既に覚醒済みの妹達のカリキュラムを受けさせ、俺自身がどのぐらい成長できるのかの確認だった。

樹系図の設計者が演算したとはいえ、経験を共有し、成長できるかは実際に目にしないと安心できないしな。

隣にいる3号と他の研究所にいる３６号がカリキュラムを受けるみたいだ。

カリキュラムは薬品の投与や電極による刺激を与えるようなもの、それからひたすら反復作業を行うものもある。例えば透視能力のカリキュラムなんかは目隠ししてポーカーに１０連続勝利するというふざけたものもあるくらいだ。

今回やるのは後者の反復作業にあたるカリキュラムで、ひたすら計測器に一定の電撃を流し続けるというものだ。一定量の電撃を流すことで電撃の制御能力の向上、持久力の向上を目的としたもので電撃使いには基本的なカリキュラムである。しかし地味だが、電撃使いは電池切れという制限があるので長時間できないという問題もある。だが二万の妹達が交代でやれば２４時間できるかもしれないな。

（じゃよろしくな、３号、３６号）

（わかりました、００００００号とミサカは返答します）

どうやらネットワーク上で経験の共有が始まったようだ。視覚的な情報――所謂3号や36号が見ているものも見ることができるが、今回は見ずにあくまで制御に関する情報のみ共有する。基本的にこのカリキュラムは見ることに意味はないしな。

結果はカリキュラム前と後で身体検査してみると成長している数値が出た。しかし同じカリキュラムを受けた成長率を考えると本当に微々たるものだが。まあそれを数で埋めるようにするんだろうけど。

今の状況だと某有名RPGでいえば、スライムから得る経験値だけでギ〇デイン覚えようとしてるようなもんだからなあ。

……本当にこの計画うまくいくんだろうか？

第十三話

いつもの自分の部屋。一ヶ月放置された部屋だが清掃用のロボットが掃除をしたらしく、塵ひとつない。1号たち妹達を呼んで今回の実験に関して聞いてみた。

「本来カリキュラムを受ける場合、被験者の能力に合わせて行われます。例えば今回の場合、００００００号はレベル４相当の電撃を制御しますが、３号や３６号はレベル３相当の電撃の制御しかできません。仮に００００００号がレベル３相当でカリキュラムを行った場合、樹形図の設計者が導き出した演算結果より大幅な期間の増加が想定されます、とミサカは説明します」

「だから被験者である００００００号がカリキュラムをこなすのと、妹達がカリキュラムをこなすのとでは大幅に成長率に差が出るのです、とミサカは断言します」

例えば腕立て伏せを２００回以上こなせる人が日々２００回やるのと、２０回やるのとでは筋肉の付き方に差が出るようなものか。

「そっか、じゃあ樹形図の設計者の計算だと1年で進化するってのは、その成長効率を踏まえた上での結果というわけか」

「そうなります」

成長率が低いので、カリキュラムだけじゃとても足りないのではと思ったが、そうでもないんだな。

「じゃあ実験自体は一年で終了するのか。一年後はやっぱり他の実

験に参加させられるのかね？」

やっぱり他の実験や研究に参加するんだろうか？

「……」

「あれ、なんでみんな黙り込むわけ？」

「なんでもありません。それよりといつもの食事はまだですかとミサカは要求します」

「いや流石に食材きれてるから明日な」

さすがに食材がないとお手上げである。今回も外出許可は取れるのかね？

「そうですか、とミサカは嘆息します」

「ん？どうした？」

「他の妹達と情報の共有を行った際、食事について確認してみたのですが、錠剤や点滴で済ませているようです、とミサカは驚愕の情報に愕然としました」

「錠剤がどんな味か味覚を共有したのですが、余りのまずさに００００号の手料理が如何に美味しいかと理解しました、とミサカは食事の重要度を上方修正しました」

そっか。１号達は最初から俺が食事だしていたけど、他の妹達はそ

うなのか。俺が最初に貰ったブロック食はまだまともなほうなんだな。

「それで他の妹達が０００００号の手料理に興味を示して何度か経験の共有を行っています、とミサカは現状を報告します」

「今では新たな食事が出た際、即時情報公開を要求される状況です、とミサカは現状の補足説明をします」

……もしかすると錠剤飲みながら、手料理の情報を共有して味をごまかしてたりするんだろうか？侘しい食事風景を想像して哀しくなった。これはひどい。……妹達の食糧事情はなかなか深刻な問題のようだ。

「食事に関しては、０００００号グッジョブです、とミサカは惜しみない称賛を贈ります」

……珍しく褒められた。仕方ないなあ、明日はご馳走作ろうかな！

（これだから０００００号はチョロいです、とミサカはさりげなく呟きます）

実験が始まって十日が過ぎた。外出の許可は降りた。今回の実験は研修として妹達も外出することがあるらしい。

ちなみに外出時の服装は常盤台中学校の制服である。常盤台中学とは学園都市でも有数のお嬢様学校で、優秀な能力者が多数在籍して

いる。オリジナルもそこに通っているらしい。

何故この制服なのかというと、万が一オリジナルの知り合いに遭遇した際にごまかすためだ。（オリジナルにより近付けるという意味もあるらしいが）最初聞いた時は、返って知り合いに会うとごまかしきれないような気がするんだが。どうやら常盤台はお嬢様学校なだけあって、校則が厳しいらしく外出時は制服でなければならないのである。だから私服で見つかれば、返って大事になりオリジナルに連絡が入りやすくなる。

まあなんだかんだで知り合いに遭遇することはなかった。二、三度同じ制服の如何にもお嬢様な娘と遭遇したが、知り合いではないようで話し掛けては来なかった。……まさか文武両道な完璧超人であるオリジナルがぼっちだから話し掛けられないことはないだろうが。

学園都市は広いのだ。そう知り合いやましてやオリジナルなんて会うわけがない。

話が代わるが、学園都市は治安が悪いようだ。治安維持のために学生で構成されている風紀委員（ジャッジメント）と教員で構成されている警備員（アンチスキル）という組織がある。

最も風紀委員は学生のためか危険度の低いどちらかと言うと交番お

巡りさんのような役回りで、警備員は危険度が高く、直接超能力者を取り押さえる役のようだ。

この間見たのは、風紀委員の子だろう。まだ小学生ぐらいの子供だったが郵便局で強盗があり、その強盗と交戦したらしい。能力者の戦いは凄まじかったのか、その子は足をやられ、シャッターごとなにかで貫かれたような跡まであった。

やはり超能力を悪用するやつらはいるらしい。専任の治安維持機構が必要ではないか？是非妹達による治安維持を検討して欲しいところだ。１年後の就職先には調度いい。２万人の数は伊達じゃない！

そんなことを考えながらスーパーに向かっていた。ああ、早く行かなきゃ。しかしやっぱり外はいい。研究所は広いが外の景色が見られないからな。

――！あれなんか今妙な感覚が体を突き抜けた。あれはなんだ？

「待ちなさい！」

不意に背後から声をかけられる。

「あんた…、何者？」

振り返れば、今学園都市で一番会ってはいけない人がそこにいた。

第十四話

振り返ればそこには今一番会ってはいけない人――御坂美琴がそこにいた。

御坂美琴――常盤台中学1年ながら7人しかいないレベル5の第三位で、超電磁砲の異名を持つ最強の電撃使い。そして俺や妹達の素となったオリジナル。

……いやあ世間は狭いですね。……ってどうすんのォ！ヤバいヤバいヤバい！！相手めっちゃ睨んでるし！！！

「……えーっとですね、あなたのお母さんのお姉さんの旦那さんの従姉妹の娘なんですけど、カエッテイイデスカ？」

「そんなこと信じられるわけないでしょ。それとも答えられない？なら痛い目にあってもいい？力ずくで聞いてもいいのよ」

こちらを威嚇するようにバチバチと彼女の身体から放電による火花が散った。オリジナルはめっちゃ好戦的である。お嬢様ではない。お嬢様（笑）だ、これ。

逃げるのは無理そうだ。ここは覚悟を決めよう。

「わかった。とりあえず場所を変えよう。ただ先に用事を済ませてもいいか？」

「ええ、いいわよ」

「わかった。ついて来てくれ」

御坂美琴は憂鬱だった。とある悩みを抱えていた。事は1ヶ月以上前に遡る。それはとある噂が流れたからだ。

超電磁砲のＤＮＡを素にしたクローンが製造されている――という噂だ。軍事利用を目的としており実用化されてそうだというのだ。最初は根も葉も無い噂だと思っていた。だがしかし完全に否定することできない。何故なら否定できないだけの理由もあったから。

筋ジストロフィー症――筋萎縮と筋力低下が進行していく遺伝性筋疾患――現代医学では治療法が無い。

脳の命令は電気信号で送られる。もし生体電気を操れれば、通常の神経ルートを使わずに筋肉を動かせるのではないか――つまり電撃使いのＤＮＡマップを解析し、生体電気を操る術を植え付けることで筋ジストロフィー症を克服することができるのではないか。

そう考えた科学者は電撃使いである当時幼かった御坂美琴にＤＮＡマップの提供を求めた。筋ジストロフィー症を目の当たりにした美琴はもちろん快く提供に応じた。――それが最善であると信じて。

その提供したＤＮＡマップがクローンの製造に関わっているのではないかと懸念しているのである。

そしてその信憑性を高めるかのように、普段と異なった超電磁砲の目撃情報がちらほら流れて来るようになった。

曰く、大量のレジ袋を抱えて歩く超電磁砲を見かけたとか。

曰く、スーパーで特番していた卵を見て「二人じゃないと安くならないのか……」と値札を睨んでいた超電磁砲を見かけたとか。

曰く、特売品を抱えて小躍りする超電磁砲を見かけたとか。

曰く、子供ぽい服を手に悩んでいる超電磁砲を見たとか。

最初それを聞いた時は思わずどこの主婦かっ?!と思った。――――最も最後の噂は当人なのだが。

ネットでは多額の研究費もらっている割にケチ臭いとか、意外と苦学生なんじゃないかという本人説と、普段の本人から掛け離れた姿に以前から噂されているクローンじゃないかという説が流れていた。

直接真偽を確かめにくる者はいなかったが、周囲の噂やネットの情報をまとめるとあまりに具体的な目撃情報と自身に身に覚えが無い事なので、クローンの噂は信憑性が高いのではと思ったのだ。

それで目撃情報のあった地域を散策していたのである。すると自分と同じような力の放射を感じた。気になり追いかけてみると、そこには自分とうり二つの少女がいた。

クローンは実在したのだ！衝撃が全身を突き抜けた。襲い掛かってくるのは、クローンに対する生理的な嫌悪。造りだした科学者達への憎悪。――そして罪悪感。

複雑な感情が入り混じったがすぐに切り替えた。もし軍事利用でクローンを造りだしているというなら、計画を頓挫させてやる――そう考えクローンの少女を問い詰めた。

少女は抵抗する気は無いのか、諦めたのか用事を済ませたら事情を話すようだ。

用事――それはスーパーでの買い物だった。ああ、噂はここまで本当だったんだ――先程までの緊張が一気に霧散した。

卵お一人様１００円が２パック買えた！着いてきたオリジナルのおかげだ。当の本人は、なんかさっきと違って凄い脱力してるけど。今は近くの公園のベンチにいる。

「んじゃまあ、どこから話そうか、オリジナル」

「……オリジナルってことはやっぱりあんた、私のクローンなの？」

「ああ、検体番号０号、一番最初に生まれたクローンで、ミサカ０００００号と呼ばれている。ま、０００００号って呼んでくれ」

「最初？ちょ…ちょっと、まさかアンタみたいなのが五人も十人もいるんじゃないでしょうね？」

「ああ、今は俺を含めて五十一人だ。今後の計画で二万人に増える予定だ。みんなまとめて妹達って呼ばれている」

超能力者進化実験で新たに生み出された妹達はまだいない。生み出すには培養器で十四日かかるし、洗脳装置による強制入力もある。最も洗脳装置にかかる時間は今までのように都度調整する必要がないので数時間で済むそうだが。

やっぱり、気味が悪いんだろうな。オリジナルの顔が青ざめている。憑依前なら自分でもそうなるかもしれない。

「……何のために造られたわけ？」

「元は量産能力者計画というクローンを軍事利用するために生み出された」

「……！どこのどいつが計画を主導してるの！！」

「現場を仕切ってるのは天井だと思うけど、どうだろうなあ？学園

都市の上層部も関わってるみたいだし。それにその計画自体は失敗で凍結しちゃったし」

「な……！？え……？」

「生み出さた妹達や俺はレベル５に進化できないってことがわかって、量産型能力者計画は取りやめたんだ」

「じゃあアンタはなんでここにいるの？それにさっきの話と矛盾するじゃない」

超能力者進化実験のことを話す。妹達二万人の経験の蓄積とネットワークで経験の共有によって、寿命のせいでレベル５になれない俺をレベル５に進化させる方法を。

「まあそんなわけで二万人を生み出すことになったんだ」

「……」

「……オリジナルからすれば、俺達の存在は受け入れられないのかもしれない。こんなバカげた計画を止めたいかもしれないけれど。

「生まれてきた俺達は実験がないと廃棄処分になるかもしれない。けど少なくとも俺がレベル５になるまではこの実験内容なら処分されることはないだろう」

だから。

「その間に妹達に感情を芽生えさせて、実験してる奴らに妹達を人

間として認識してもらう。そうすれば簡単に殺そうとは思わなくなるはずだ」

オリジナルの目を見る。

「だから俺達に生きるチャンスをくれないか？頼む」

そう言って俺は深く頭を下げた。

第十四話（後書き）

００００００号が量産型能力者計画で買い出ししている姿を見られたために、クローンの噂がかなり早い時点で出回っています。

第十五話

顔を上げられない。オリジナルはどう思ったか不安だ。勢いで言ったけど、失敗したか？心臓がバクバクいってる。

「……とりあえず頭あげなさい」

顔を上げ、オリジナルを見る。腕を組んで険しい顔をしているな。

「アンタの言い分はわかったわ。けど具体的にはなにをするつもり？」

「うっ……」

感情が芽生える方法か。基本的には見守ることしかしなかった。色々な経験を経て成長するのだから、いつかは時間が解決してくれるかもしれない。だが、限られた時間がある以上何らかのきっかけは考えなければならないだろう。少なくともオリジナルは納得しまい。

実の所全く考えがないわけではない。一つは自身の感情をミサカネットワークで共有できないかというものだった。しかし感情データがどういうものなのか、わからない限り共有することが不可能だ。

もう一つは洗脳装置を使った感情の入力である。一人にでも感情が入力できれば、あとはネットワークで共有できるかもしれない。し

かしこれは感情はどういったデータかわからない問題に加え、洗脳装置を使うには専用家が必要だ。

洗脳装置の専門家――一人だけ心当たりがあるが。

「本来、感情は自発的に芽生えないといけないと思う。けどきっかけになるものなら、一つだけ思い当たる方法がある」

「その方法は？」

「妹達は肉体や人格を速成させるために色んな技術を使ってる。その中で知識や人格なんかは洗脳装置って呼ばれる機械で脳情報を入力して調整しているんだ。だから、それを使って擬似的な感情を入力すれば、本来の感情の芽生えを誘発できるかもしれない。……最も感情を入力できるのかどうかはわからないけど。けれど洗脳装置を監修した人なら可能かもしれない」

それでも、それでも砥信さんならやってくれる……！

「布束砥信。彼女を見つけ出す」

しかし砥信さんを探すとなると大変だな。どうしよう。

「そう、わかったわ。じゃあ私がその人は探すわ」

「外出してる時間に限りがあるし、それは助かるが、いいのか？」

「ええ、元はと言えば私のＤＮＡが原因だしね。勝手に使われているのはしゃくだし、自分で撒いた種だもの。自分の手で片を付けるわ」

まさか協力してくれるとは。

「オリジナル……お前結構いい奴なんだな……」

「なっ、ちっ違うわよ！ただでさえ、勝手にクローン造られたから研究を止めたいだけよ！！……っ、アンタその温かい目はやめなさい！！！」

照れだろうか、電撃を放出するオリジナル。オリジナルの優しさはビリビリだ。

「なんかアンタといると、たまに疲れるわ……。というか、アンタ本当にクローンなの？話を聞く限りだとクローンは感情ないんでしょ」

「とある人格が憑依して感情が宿ったんだ」

「……笑えない冗談ね。どこの漫画の設定よ」

ですよねー。まあ普通は信じられないよな。

「まあ原因はよくわからないんだわ。他の妹達と違ってレベル５に

進化できるみたいだし、まあ気にするなオリジナル」

「他の妹達がアンタと同じでなくてよかったわ。あとオリジナルって呼ぶのはやめなさい、御坂美琴って名前があるんだから」

んー気になるか。じゃあ。

「じゃあお姉様で」

憑依前からすればずっと年下の子だけど。

「はぁ？」

「いや他の妹達はお姉様って、呼んでるんだ。見た目でみて姉妹に見えるしいいんじゃないか、お姉様」

「……はぁ、まあいいわ」

納得はいってないようだが、諦めたようだな。

「時間も危ないし、そろそろ帰るわ。定期的にこの辺に買い物にくるから、もし布束さんを見つけたら教えてくれ、じゃまたなーお姉様！」

そういって遠ざかっていくクローンの少女を美琴は見送った。

クローンとは思えないような表情豊かな少女――。

彼女は、ただクローンとして造り出された自分達の生を欲した。純粋な生の渇望。普通の人より、より人間らしいと感じた。

クローン製造の計画は止めたい。だが彼女の生きるチャンスは潰したくはない。

少女の言っていることに嘘は感じなかった。しかし、研究自体には疑問があった。

量産に失敗したクローンをレベル5に進化させて何に利用するのか？

たしかにレベル5は貴重だ。しかし、自分のクローンが同じ能力なら、自分は様々な研究に協力しているので、十分なデータがあるはずである。新たな研究を興すような話は聞いていない。軍事利用は凍結したから違うだろう。

本来研究は何らかの目的があって行われるはずだ。それが不明瞭なのである。

それが何かはわからない。理解するには情報が少な過ぎる。

彼女から聞いた情報――量産型能力者計画、科学者・天井、妹達、超能力者進化実験、そして布束砥信。これらがキーワードだ。

幸い発電能力者である自分はネットワークから様々な情報をハッキングして入手できる。まずは情報収集が必要だ。

――絶対に妹達を命を奪わせない。

超電磁砲が今学園都市の闇に立ち向かう――。

第十六話

なんか主人公が途中で変わったような気がする００００００号です。

現在、正座中です。周りには妹達がいます。

「買い物でお姉様に遭遇するとは迂闊です、とミサカは００００００号を叱責します」

えーと、なんでバレてるんでしょうか？

「ミサカネットワークからお姉様と遭遇したことはリアルタイムで情報を得ています、とミサカはネタバレします」

……まさかストーキングされてます？

「しかしお姉様に知られた所で実験の障害にはならないのではないでしょうか、とミサカは疑問を提起します」

話を逸らされた気もするけど、確かに協力してくれる話になったからな。本来ならなじられても、実験を止められても文句は言えない。初対面でしかもクローンが一方的にお願いしたけど、文句一つ言わなかったし。お姉様はいい人だよな。

「確かに実験を止めるとなると一個人でできる事は高が知れています。妨害されたとしても、前の計画のように計画の前提が破綻でもしない限り、実験は継続するため障害にはならないでしょう、とミサカは判断します」

破綻ねえ。この実験だと俺がいなくなっちゃえば止まりそうだけど、その時点で妹達に死亡フラグが立ちそうだからな。それは一番出来ない。むしろ時間稼ぎはしたいんだが。

「所で０００００号。お姉様との会話の中で、私達に感情を芽生えさせる話をしていましたが本気ですか、とミサカは問います」

会話もバッチリ盗聴されているんですね。

「本気だぞ。前も言ったけど、俺達は人と大差無いはずだ。だからきっと感情だってある。クローンだからって自分を卑下しなくてもいいんだ。人扱いされないで廃棄処分されていいなんてことはない」

「妹達は計画の為に造られた模造品です。作り物の体に借り物の心。人扱いされないのも計画が無ければ廃棄されるのも当然です」

「体はそうかもしれないが心はそうなんかじゃないさ、お前達は」

俺は今まで過ごして知っている。皆同じ姿だが、表に感情を出せないがそれぞれ違う個があることを。

「外の事が気になって仕方ない１号、甘いもの好き２号、一番手伝ってくれる３号、綺麗好き４号、みんなに虐められると助けてくれる５号……他の妹達はあってないからわからないけれど、けど全く同じ妹達はいないはずだ。だからお前達がいなくなったら、お前達の代わりはいない。いなくなったら俺が悲しいぞ」

「悲しい――ですか」

「どうして０００００号はそこまで私達を気にするのですか」

昔の自分を見てるようで助けたいってのもあるけど、これは言いづらいな。

「まあ、俺はお前達のお姉ちゃんだからな。妹達を気にして当然だ」

「……」

あれー返事ないんですけど。ひょっとして外したかな？

ミサカ１号は考える。００００００号の事を。思えば初めて会ったときから、何処か変わった個体だった。

妹達は感情がない。その筈なのに、他の人間と遜色ないイレギュラーな００００００号。ネットワークや洗脳装置で知っていなければ、人間だと認識したはずだ。

感情の入力や調整をされたわけでもなく、持って生まれた感情で動く００００００号は妹達の間でも興味が尽きない。布束という科学者は特に興味を持ち影響を受けたのではないか。

彼女は００００００号と比べると、余り表情を変えないからむしろ妹達に近い印象だ。だが００００００号と一時期距離を置いていた時は、やや落ち込んでいるように見えた。

そして自分達も少しずつではあるが００００００号に影響を受け始め

ている。

一番は食だろうか。食への興味はあったが、さほど重要なことではなかった。００００００号の手料理は決して知識にある一流の調理法で作られたものではない。だが美味しい。妹達の間で料理の情報のやり取りが行われるくらいだ。もしかすると他の妹達は羨んでいるのかもしれない。そういった点では自分達は恵まれているだろう。

００００００号は自分達を、そして周りの環境を変えようとしている。クローンと人間の違いはないと訴え、感情を芽生えさせて人とは違わないと証明させたがっている。人として生きる為に。

だが自分達はクローンだ。感情があったところでそれは変わるとは思えないし、いつかは処分されるだろう。例え処分されようと代わりのきくものだ。

――しかし。

――００００００号が処分されたら。彼女と同じ個体は生まれるだろうか？

どうして感情を持った妹達ができたのかわからない以上、それは不可能だ。そう考えると理解不能なノイズが走る。それがどうしてなのかよくわからない。

「……あのそろそろ勘弁してもらってもいいでしょうか？足が痺れて痛いんですけど」

未だに正座をしている自称姉は若干涙目だ。

「……不出来な姉を持つと妹は大変です、とミサカは嘆息します」

００００００号――本当に不思議な個体だ。

第十七話

お姉様と会った事はどうやら黙っていてくれるらしい。聞かれたら答えるが聞かれなかったら答えないというスタンスだ。まあ口頭で注意された訳でもないしな。怒られ損な気もするが確かに結果オーライとは言え注意不足だ。深く反省せねば。

そんなこんなで一ヶ月過ぎた。もうすぐクリスマスと年越しらしい。お姉様には残念ながら会えないでいる。実験のスケジュールが優先だから外出時間がどうしてもバラつくからかもしれない。砥信さんとは会えたんだろうか？

妹達は順調に数を増やしている。この研究所でも既に１００人を越えた。全体でみると月に約２０００人くらいのペースだ。人口受精卵から促成したとしても二週間かかるので、妹達の増員にも限界はある。しかしこのペースだと二万人揃えるだけで、十ヶ月はかかるはずだが間に合うのか？実験は一年だったはず。だが天井が言うにはスケジュール通りらしい。

妙な違和感は感じつつも、日々は過ぎていく。そして何の予兆も無く事件が起きた。

――――サイバーテロによる複数の研究所の破壊工作。それは妹達や実験に関わる研究所のみ起きた。

突然機器が壊れたり、火災が発生し炎上したものの、不幸中の幸いか研究員や妹達に被害は無い。しかし機器やデータは全壊、二十ある施設が十六基も壊されてしまったため、全壊してしまった機器の代わりを揃えること、他の研究所への移送作業で実験が若干遅延するようだ。

関連施設からの襲撃から見て犯人は明らかにこの実験を狙っている。その為残りの研究所は電気的な外部の通信を一切遮断した。

犯人は今のところ捕まるどころかわかってもいない。ただ学園都市には様々な研究グループが存在し、似たような研究を行っていると妨害工作してくることもあるそうだ。なのでその一部の犯行かもしれない。正々堂々と研究で勝負すればいいのにとは思うが、限られた予算や期限によっては強行手段を取ってもおかしくはないそうだ。にしてもクローンを使った似たような実験は他にもあるのかと辟易した。

こちらとしてはスケジュールの遅延は内心ありがたい限りではあるが、スケジュールの唐突な変更は研究者達を困らせている。他の研究所では妹達の手も借りてるぐらいだ。

残る研究所は四基。サイバーテロは出来ないから、もしかすると直接襲撃されるかもしれない――なんてな。なんだかんだでここはセキュリティが高い。訓練でここのセキュリティのハッキングをやろうとしたけど複雑過ぎて電子ロックの扉を開けるので精一杯だった。レベル４でこれなら、例え能力者でもそう簡単に内部には侵入されないだろう。それに研究の遅延目的なら充分成功してるしな。襲撃なんて起こらないだろう。

――そう思ってた自分が馬鹿でした！この世界が俺に優しくない世界だって、死亡フラグ満載の世界だって忘れてた！

モクモクと充満する煙、時折爆発音が聞こえて来る。どうやら襲撃されたようです、本当にありがとうございました。

サイバーテロではたまたま被害がなかったが、いつこちらに被害が来るかわからない。百人を超える妹達とともに消火作業にあたる。施設自体にも消火装置があるはずなのだが、電子機器が異常を起こして動作してないからだ。

こういう時、ミサカネットワークは便利だ。ネットワークを駆使して研究所内の見取り図を共有、被害が出ている場所に妹達を迅速かつ効率よく割り振る。増員が必要ならばすぐに連絡が来るし、作業が終われば次の仕事の割り振りも即時行われる。レスキューミサカでもやっていけるかもしれないな。

消火作業に当たっていると、もの凄い音が響いてきた。あれは何処かで聞き覚えがある……あれは雷撃の槍の音だ！もしかすると侵入者かもしれない。となると侵入者は発電能力者か！サイバーテロも能力者の犯行が疑われていた。同一犯の可能性が高い。

息を殺して音のするほうを見遣る。一室から出てきた奴は深々と帽子を被っていて誰かはわからないが、体格からして俺達に近いから少女だろう。

俺達のような少女の発電能力者――――？まさか、そんな。

不意に以前とある時に感じた違和感が襲った。間違いない。あの人は彼女だ。

少女は事を終えたようで直ぐさまその場を跡にした。しかし俺はその場を動くことは出来なかった。

一体どういうつもりなんだ……お姉様！？

第十八話

襲撃を受けたのはここだけでは無かったらしい。他の施設も同様に襲撃を受けた。残る研究所は二基。

俺といつもの五人を含む二十名の妹達はそのひとつの研究所にいる。襲撃を受ける可能性があり、緊急に移送しなければならなくなったのでその手伝いのためである。他の妹達も二十名ほど残りの研究所から実験を引き継ぐ新たな外部研究所への移送作業を行っている。

犯行手口はほぼ同じ。施設に直接侵入して機材及びデータの破壊活動を行った。死傷者はなし。セキュリティは悉く反応せず、警備員や研究者は警報を誤作動させて遠ざけていたので目撃者なし、監視カメラも襲撃者を捕らえる事ができなかった。このままでは実験の中止も有り得る状況だ。

唯一の目撃者である俺はその事を黙っている。やはり何故という疑問が尽きないからだ。

あの時お姉様は間違いなく実験は潰さないと約束してくれた。しかし今の状況はどちらかと言えば、実験を潰しにかかっている。これはどういうことだ?

あの場では演技だったのだろうか?――いやそれならば妨害自体もっと早く行われてもおかしくはない。一ヶ月も待つ必要性はない筈だ。それ以上に演技のような気がしない。

となると、一ヶ月の間に心変わりするような事があったのか？

お姉様は砥信さんの探索を引き受けてくれた。もしかして砥信さんと会って何かを知ったのか？知ったから実験を妨害しにきた？やや飛躍しているし根拠もないが、それが一番しっくり来る。

だがその場合なにを知ったんだ？実験を潰すとなるとよほどの事だ。だがレベル５に進化させるだけの実験じゃ、潰す程の理由にならない。もしかして俺の知らない何かがあるのか？

くそ、わからん。妹達と相談したいけど、実験を妨害しそうな理由に関しては対立グループが研究の妨害をしているんじゃないかという話でまとまってたし、あまり詳しく話すとお姉様が襲撃犯とバレる可能性が高い。

あの時お姉様に聞ければよかったが、さすがに呼び止められなかったし。ああ、こんな時砥信さんがいればなあ。

研究所は慌ただしい状況だ。一晩で施設内の全研究データの移送をするのだから妹達の手も借りたいというわけだ。にしても膨大な資料の山だな。ジェ◯ンニが欲しいね。

妹達を４人のグループに分け、それぞれが研究員の指示を受けながら膨大な研究データを搬送していく。一体何往復するんだろうか、これ？段ボールの箱の山を見ると妹達全員連れて来たくなるわ―。

しばらく段ボール達に悪戦苦闘し、一段落した所で新たな指示を貰うため、研究員を捜す。みんな忙しそうで声かけづらいな。

研究室を一望できる階上のガラス張りの所にいる中年の研究員と若い女性が視界に入った。――――!?あれは砥信さん!?なんでこんな所に?実験には参加していなかったはずだ。もしかして参加することになったんだろうか?

とにかく聞きたいことが沢山ある。会いに行かなきゃ!作業を放置して砥信さんのところへ向かう。

砥信さんはちょうど部屋から出てきた所だった。

「砥信さん!」

誰かに咎められたようにビクリと体を震わせ振り返る彼女――――間違いない、砥信さんだ。

「あなたは０００００号?どうして此処に?」

「移送の手伝いでここに来たんだけど、砥信さんを見かけたから、つい作業すっぽかしてきたんだ。久しぶり砥信さん」

「そう……ｈｏｗｅｖｅｒ、これは好都合かもしれない」

好都合?どういう事だ。

「いい、ここから逃げ出しなさい。出来れば妹達を何人か連れて」

「逃げろって……もしかしてお姉様が研究所を襲撃してることと関係があるのか？」

「そう、そこまで知っているのね」

やはりお姉様と砥信さんは会っているようだ。襲撃も知っているとなると共犯なのか？一体どうして？

「あなたは何も知らされていないようだけど、あなたが受けている実験はとある実験の副産物に過ぎないわ」

レベル５に進化する実験が副産物？どういう事だ？レベル５は能力者で最高位のはずだ。それが副産物だなんて。

「その計画は絶対能力進化（レベル６シフト）実験――――。学園都市最強のレベル５である一方通行（アクセラレーター）を絶対能力者（レベル６）に進化させる計画よ」

え？最高はレベル５じゃなかったのか？疑問を口にする前に、砥信さんは続きを言った。

「その計画は進化させるために――――一方通行に２００００通りの環境で妹達を２００００人殺害させるわ」

は、い――――？

「あなたが関わっている実験はその計画が前提になっている。ｎａ

ｍｅｌｙ、２００００人の妹達を犠牲にして、レベル６とレベル５の能力者を生み出すつもりよ」

……なんだよ、それ。

第十九話（前書き）

一部修正しました。展開に変更はありません。

第十九話

世界はいつだって、こんな筈じゃない事ばっかりだ――――とあるアニメの台詞だ。現実は理不尽だ。誰しもがその現実の中で生きなければならない。思い通りにいくなんて殆どない。なるほど確かにその通りだ。

軍事利用で生み出されて、失敗したと分かれば欠陥品と蔑まれ、今度は実験動物として拾われたら、たった二人のための生け贄だと――――。

――――ふざけるな！そんなふざけた理由で妹達は二万人も虐殺されるのか！計画した奴らは気が狂ってる！

「詳しい説明がしたいけど時間が無いわ。ａｎｙｗａｙ、妹達と逃げなさい。その分計画が遅延するはずよ」

「わかった。砥信さんはどうするんだ？」

砥信さんがこんな狂気の実験をするとは思えない。なんなら一緒に逃げるべきだ。

「……私は残るわ」

「どうして！？」

「私にはやる事がある。私にしかできない事が。だからあなたはあなたのすべき事をやりなさい」

彼女は覚悟を決めた顔だ。止める術はない。

「……わかった。砥信さん……必ずまた会おう！」

「ええ、また必ず」

振り返らずに妹達の元へ急ぐ。なんとか一緒に逃げるように説得しないと……。

最後に００００００号に会えてよかった――布束砥信は思う。

彼女がこの研究所にいるのは、とある研究グループから絶対能力進化実験に参加要請を請けたからだ。

急に呼ばれた理由の予想はつく。先方は妹達の調整実績から大掛かりな移送作業で不備が起きないか確認してほしいということで打診したそうだが、大方研究所を襲撃された時に責任をなすりつける気だろう。

これは御坂美琴と連携して行ったわけではないが、結果的にこの施設に潜り込むための布石となってくれた。しかも移送作業を優先し、外部への警戒が強くなっているため内部のセキュリティが甘くなっ

ている。

計画の内容を知り、計画を内部から妨害する為に準備をしてきた彼女に取っては、絶好の機会である。

――御坂美琴は直接施設を襲撃し、計画を頓挫させようと動いている。だがそれでは例え完遂したとしても計画が中止する可能性は低い。

それだけ絶対能力者という存在は大きいのだ。誰もが到達したことがないレベル６は。

過去に幾人の研究者がレベル６への到達を目指したが、悉く失敗に終わった。なかには実験するまでもなく樹形図の設計者の予測演算によって絶望的だと導き出されたものもある。

だが今回は樹形図の設計者の予測演算が成功をはじきだしたのだ。今まで誰もなし得なかった栄光。研究者ならば誰もが夢見るだろう。

そのため何としても計画を存続させようとするはずだ。利権さえ考えなければ外部の研究機関に研究の引き継ぎを行うだけだ。事実、彼女の予想通りに研究の移送を今行っている。

となるとそれ以外の方法で計画を妨害するしかない。利で計画を覆す事はできないのだから。調整中の妹達がいる部屋へ向かう。妹達の移送は最後のはずだ。洗脳装置に妹達がいる。まだ調整中の状態だ。慣れた手つきでコンソールを操作する。そして白衣のポケットから取り出した記憶媒体を端末に差し込んだ。

これは量産型能力者計画の頃から妹達の為に集めていた感情データを改修したものだ。本来これを使うつもりはなかった。これはあくまでプログラムに過ぎないし、いつか自然な形で妹達の真の感情が芽生えて欲しいと考えていたからである。それでも集めていたのは最後の手段として、妹達の感情の発露に役立つのではと考えたからだ。

しかし今はそうもいっていられない。とある感情に特化したデータを調整中の妹達に強制入力する。その感情とは『恐怖』。

研究者達は妹達を実験動物としてしか見ていない。だからこそ二万人殺すことになっても、何の感慨もないのだ。

だが、もし妹達に恐怖のプログラムを入力したら。

死を当然のこととして受容する妹達の中からその運命を嘆く者が現れるかもしれない。その姿に実験動物以上のものを感じ取る研究者が現れるかもしれない。そんな彼女達の声が誰かの心を動かし、計画を中止させるかもしれない。

利ではなく情。研究の関係者の良心に訴え計画を中止させるのが彼女の妨害方法。

もちろんすぐに効果があるかと言われればＮＯだ。可能性も高くはない。妹達も何人か犠牲になるかもしれない。だがその可能性に賭けた。自分と０００００号のような関係が誰かしら築けると信じて。

ガンッ――――！

いきなり後頭部を押さえ付けられ、コンソールに叩きつけられる。

「関係者である可能性を考慮して上に確認をとりましたが」

顔はコンソールに押さえ付けられたまま、腕をねじられ即座に拘束された。

「データ類の移送が完了するまではここへの立ち入りは超禁止とのことでした」

「ぐ……あ……」

拘束した少女はねじる力が増した。布束砥信は思わず声を上げる。

「襲撃者は単独犯であると推測されているが一方の襲撃が超陽動である可能性を捨てるべきではない――どうやら麦野の読みは超当たっていたようですね」

布束を拘束する少女の名は絹旗最愛。今回の襲撃事件で施設防衛の依頼を請けた学園都市の暗部「アイテム」の構成員である。

「このまま依頼人に引き渡します。抵抗しても超無駄です」

背後にいる柄の悪い二人の男が近づく。

（無駄な抵抗？確かにそうかもしれない――）

布束は思う。問題は計画だけではない。仮に計画が頓挫しても、クローンが普通に生活できるだろうか？さらに過酷な運命になるだけではないか？迷いがないわけではない。

だがしかし、計画の全貌を知り一人で立ち向かうと覚悟し、全てを背負い込んだ少女がいた。こんな自分を信じて動いた少女がいた。

だから止まるつもりはない――――！あの子達に運命を切り拓くチャンスを！

「……！」

絹旗は異変に気付き布束を投げ飛ばして、コンソールを叩き壊す。だが一足遅かった。

端末の画面には、「インストールが完了しました。ミサカネットワークに接続しています」と表示されていた。布束は絹旗に見えないように片手でコンソールを操作し、入力を完了していたのである。

ニヤリと笑う布束。これで入力した感情プログラムは全ての妹達に共有される。誰にも止められない！

はずだった。

端末から警告音が流れ、接続がネットワーク側から中止された旨のメッセージと「上位個体２００００１号のものでないコード」という

警告メッセージが表示されたのである。どうやら上位個体を介さないとネットワークを使うことができないらしい。だがしかし、上位個体など存在しなかったはずだ。

（何だこれは!?いつの間にこんなセキュリティが……！！）

「よく分かりませんが、あなたの目論見は超失敗したようですね」

絹旗の言葉に布束の顔は絶望に染まった。

第十九話（後書き）

この時点でアイテムいたの？といわれると疑問ですが参戦させました。

上位個体に関しても悩みましたが、個体が存在しなくてもセキュリティ自体は設定できると思ったので、そのままです。

第二十話

急いで妹達のいる場所に戻ってきた。まだみんな慌ただしく作業している。幸い研究者達は気付いていないようだ。

「どこに行っていたのですか００００００号、とミサカは問い質します」

「いなくなっていた間のフォローは大変でした、とミサカは愚痴ります」

と一緒に作業してた妹達。それはどうもごめんなさい――じゃなくて。

騒ぎを聞き付けられると困るから、ミサカネットワーク越しに話しかける。

（大変なんだよ、このままここにいるとお前達が死んじゃうんだ！絶対能力者進化実験とかいうやつで）

殺されてしまうんだ。だから早く逃げないと――と続ける前に妹達の一人が答えた。

（どこでそれを知ったのですか？００００００号は関係者ではないから通達されていなかったはずです、とミサカは問います）

――それはつまり。

（お前達知っていたのか？！）

なんで黙っていたんだ、このままだと間違いなく死ぬんだぞ！？

（関係者以外には機密事項だったからです。０００００号はこの計画の関係者ではありません、とミサカは答えます）

そういうことか。俺はあくまで超能力者進化の関係者ではあるが、絶対能力者進化実験に関わっているわけじゃない。例え後者の実験を行わないと成功しない密接な関係を持つ実験だとしても、あくまで別の実験という認識なのか。

（でもお前達を犠牲にしないとレベル５になれない計画なんだろう？だったら関係あるじゃないか！俺は妹を犠牲にしてまで進化なんかしたくない！）

能力を使うことは楽しいから、カリキュラムを受ける分は構わない。能力が進化するのも人並みに欲してるかもしれない。けど、二万人を犠牲にした進化なんて絶対に耐えられない！

（ミサカは計画の為に造られた模造品です。実験動物に過ぎません。実験が無くなれば、ミサカは存在理由がありません、とミサカは答えます）

だから死を受け入れるのか？前から思っていたが、自身の命を粗末にしすぎだろう。こんな命を弄ぶような運命なんて受け入れちゃダメだ！

存在理由がそんな下らないことしかないなら、それだけじゃないってことにしてやる！

（だったら俺の為に生きてくれ！）

ありったけの気持ちを込めていった。

（……それはどういう事でしょうか、とミサカは問い掛けます）

（前にも言ったが、お前達がいなくなるのは辛い。この計画でお前達の命が奪われるって考えたら胸が張り裂けそうだ。そんな気持ちになんてなりたくないんだよ！）

眼が潤む。耐え切れそうにない。

（だからずっと傍にいてくれよ！頼むから！）

眼から涙が零れた。

――なんて我が儘な言葉だろう。これはまるで駄々をこねる子供だ。と妹達は思った。

自分達は代わりがきく、命の価値は無いものだ。そう信じている。今まで００００００号は自分が処分されることを怖がり、自分達が処分されたら悲しいと言った。事実今彼女は泣いている。疑ったわけではないが、泣くという行為を初めて目の当たりにしたため衝撃が走った。

彼女は何故泣いているのか。自分達が殺されることを知ったからだ。

何の価値も無い自分達を失ってしまう――それだけで哀しむ人がいるのだ。

そう考えると、死ぬことができなくなった。こんな自分達を失って哀しむ人を助けることができる。それはとても素晴らしい事ではないかと思えた。

それにこのシチュエーションに該当する状況は、洗脳装置の情報によればまるで――愛の告白ではないか？ずっと自分の傍にいてほしいなんて、告白の常套句である。

そう思うと不思議と胸が暖かくなる。初めての感覚に少し戸惑いを覚えたが、身体に不具合はない。

（これがなんなのかはわかりかねますが――、何故だか、その言葉はとても響きました、とミサカは率直な感想を述べます）

――シリアスな状況なのに何故だか大きな誤解が生まれた。

「分かりました。どうすればいいですか、とミサカはお姉様に問います」

お姉様――？まあ姉と自称しているからそうだけど。まあいい。それよりも理解してくれたようだ！

「ともかくみんなで逃げよう！」

一斉にいなくなるとバレるかもしれない。さっきの作業グループごとに段ボールを運ぶ振りをして脱出するようにした。

総勢二十名の大脱走だ。どうしても時間がかかる。殿は俺のグループだ。他の妹達より能力の高い俺ならば、なにかあった時、多少強引気味にでも切り抜けられやすい。

幸いなことに先行している妹達の情報によると、外への通路までは誰も気づかなかったようだ。手際が恐ろしい程いい。よく考えると自分達は軍事利用されようとしていたから、潜入工作なんてのも洗脳装置で知識を得ているんだ。脱出時の隠密行動も一般人のそれより能力が高い。

電子ロックは能力で解除していく。他の高度なセキュリティはお手上げだが（警備ロボットなど。操ることは難しいので壊すぐらいしかできない。その時点でバレる）移送で内部のセキュリティが甘くなっている。ならばこの程度ならなんとかなる。よしこのまま脱出できる！

そう気が抜けた瞬間だった。

「おい、そこでなにをしている！」

しまった、見つかったか！即座に雷撃の槍で迎撃しようと行動する。ここまできたら強引に行くしかない！

振り返りつつ、声をかけた若いチンピラみたいな男（何故研究所にいるんだ？と思った）に向けて雷撃の槍を放つ。幸い一人だ。男の手には拳銃？！

――一発の銃声が研究所内に響いた。

第二十一話

絶対能力者進化実験。

量産異能者（レディオノイズ）「妹達」の運用における超能力者「一方通行」の絶対能力への進化法。

樹形図の設計者によると、学園都市最強の超能力者である一方通行のみが絶対能力という深淵に到達できる。ただし通常のカリキュラムを２５０年組み込む事でだが。

２５０年人体を活動させる「ニ五〇年法」も検討されたが保留とし、他の方法がないか検討された。その結果、樹形図の設計者が実戦における能力の使用が成長を促す事を導き出したのだ。であるならば、特定の戦場を用意し、シナリオ通りに戦闘を進める事で「実戦における成長」の方向性をこちらで操ることはできないだろうかと考えた。

樹形図の設計者の演算の結果、一ニ八種類の戦場を用意し、超電磁砲を一ニ八回殺害することで絶対能力者に進化できることが判明する。

しかし当然超電磁砲を一ニ八人も用意できない。そこで妹達に着目した。妹達を超電磁砲の代わりに使い同様の結果が得られないか、と。

妹達は超電磁砲より性能が劣る。二万通りの戦場を用意し、二万人の妹達を用意する――圧倒的な数で同等の結果を得ることができた。

二万種の戦闘と戦闘シナリオも演算された。時間、使用される武装にいたるまで全て。

九八〇ニ通りの屋内実験、一〇一九八通りの屋外実験は全て演算により算出された緻密な実験なのである。

――だからこそ想定外の事象が発生してしまった場合は脆い。

妹達脱走――。

それはその想定外の事象に十分該当した。

本来は絶対有り得ない状況に研究所は騒然となった。基本的に妹達は従順で計画から逃げ出すとは考えられなかったからである。しかも二十人も。

最後に妹達を見かけたであろう男――アイテムの下部組織の男は妹達に発砲したあと、彼女が発した電撃で気を失ったらしい。馬鹿が――殺してしまったらまた造り直さねばならなくなるじゃないか！研究者たちは暗部はやはり暗部でしかないと溜息をついた。

しかし研究所に残った妹達のミサカネットワークから脱走した者の居場所は特定できる。

ならば早急に居場所を特定し探索部隊で取り押さえなくてはならな

い。実験の開始日が差し迫っているのだから。

だがしかし。逃げ出した妹達は足跡を追うことはできなかった。

ミサカネットワークから彼女の存在が確認できなくなったからである。

では彼女達はどうなったのか。研究所からの逃走時に話は遡る。

男の拳銃に気がつくのが遅かった！銃口は明らかに俺に向いている。

間に合わない！

銃声が鳴り響く。

「……っ！」

思わず目をつむる。――痛みがこない。まさか外したのか？

そうではなかった。目を開けば原因は歴然だった。男と俺の間の空間は遮られた。傍にいた3号が身を呈して。俺を護ってくれたのだ。

「3号！」

「だ、大丈夫です、とミサカは答えます」

意識は大丈夫のようだ。どうやら腕をやられたらしい。腕から血が

溢れている。男は電撃を食らい気絶したようだ。

ブレザーを脱ぎ、シャツの袖を破いて腕を縛る。今はこの程度の応急処置しかできない。とにかく安全な場所まで逃げないと！

研究所を抜け出して一時間半。今は地下の下水道を歩いている。逃走時追っ手が懸念された。居場所がバレればすぐに捕まるだろう。妹達の居場所がわかるミサカネットワークと人工衛星による監視、これらの追跡をかわさなくてはならない。

ミサカネットワークは電波だ。だから電波の脆弱性も当然引き継いでいる。妹達の中継があったり、比較的浅い階層の地下なら問題ないが、入り組んだ深い階層の地下であれば電波が届かない。

当然人工衛星も地下深くまでは監視できないだろう。

以前お姉様との会話をネットワーク越しに盗聴された時に、盗聴されないようにするにはどうしたらいいかなんて考えてた事がこんな所で役に立つなんて不思議なものだ。

けれど、3号の体調がまずい。こんな不衛生なところにいたら怪我が悪化してしまう。出血が多いのだろう、顔色が悪い。

――限界だな。

これ以上ここにいるのは得策ではない。とにかく治療を優先すべき

だ。となると、ドラッグストアか病院あたりに忍び込むか。

「3号、大丈夫か？今から治療しに外に行くからな」

こくりと3号が頷き、意識を失って倒れた。やはりかなり我慢していたらしい。少し頭を撫でた後、彼女を背負い、他の妹達と共に地上に出た。

近場にあったかなり広い病院に忍び込む。できればドラッグストアのほうがよかったが、周辺にはなさそうだ。セキュリティは研究所ほど厳しくない。

侵入するのに抵抗がないわけではない。申し訳ない気持ちになりながらも一室のベッドの上に3号を寝かせ、包帯や薬を探しに行こうとしたけど、他の妹達が代わりに探しに行ってくれた。

二人きりになって少し落ち着くと、色々考えてしまう。これからどうすればいいのか。

このまま逃げ続けるにしても、二十人も隠れる場所はそうそう見つからないだろう。しかも現金も身分証もないので、日々の生活もままならない。なんとかしないといけないが方法が思い付かない。妹達とも相談するべきか。

それに砥信さんやお姉様、他の妹達も気になる。特に研究所を襲撃しているお姉様や残った砥信さんはどうしているのだろう。無事な

らばよいが。

計画を頓挫させるとなると二人の協力してもらったほうがいいかもしれない。俺が知らない計画の詳細も知っているだろうし。砥信さんの住所はわからないが、お姉様なら学校経由でわかるかもしれない。まずはお姉様を探そう。

考えがまとまった時に、人の気配がした。妹達か？

「おや、泥棒かと思ったが怪我人かい？」

白衣の男！？見回りか！

「近づくな！」

「でもね、僕は医者だから。彼女を診ないとね？かなり傷が深そうだしね」

どうする？しばし睨みつける。応急処置しかできないから、診てもらえるなら助かる。３号に無理はさせられない。何か事が起これば、最悪他の妹達は逃がそうか。

「……わかった。……妹を助けてくれ、頼む」

頭を下げる。

「患者の命を救うのが僕の仕事だからね。なんとかしてみるさ」

それがカエル顔の白衣の男――冥土帰し（ヘブンキャンセラー）との出会いだった。

第二十一話（後書き）

携帯でゼロがうまく変換できず図形の丸で代用してます。

第二十二話

Q、銃弾を受けた腕の怪我及び多量の出血を伴った体の治療にどの位の期限を要しますか？

A、全治二日です。

はい？

いやいやいや。冗談はいいから！憑依前でもそんな大怪我したことないけど、流石にそんな短期間に無理だって！！てめぇ、俺の妹を冥土に送り帰す気ですか！？

――そう思っていた時期がありました。学園都市の医療技術をナメていた。冥土帰しは、正しくヘブンキャンセラーだったのだと知ったのは、３０分ほどで処置を終え3号の顔に血の気が戻っていく様を間近で看てたからである。

あとで聞いたが冥土帰しは学園都市でも有数の技術を持つ医者であり、どんな病気や怪我でも治すと呼ばれる名医なのである。

３号に施された治療は、肉体再生（オートリバース）という能力――自身の肉体の損傷を回復する能力の原理を医術に組み込んだ治療法なんだそうだ。

学園都市ではこのように能力のメカニズムを解明し、様々な分野に

応用している。……俺達もこういう利用のされ方なら納得できたんだろうが。

「さて、君達が何者なのか教えてくれるかい？流石に二十つ子って話ではないと思うんだがね？」

治療を終えた冥土帰しが問う。３号が無事治療されたので他の妹達も傍にいる。そりゃ同じ顔が二十人もいればおかしいか。

だがどうしたものか。全部話してもいいか悩む。内容は問題ありまくりの超秘密事項だ。いい人そうだけに関わらせるべきかどうか。

「だいたいの事は予想はつくけどね。君達が困っているなら力になりたいんだ」

……仕方ない。俺は知っていることを全て話した。

事情を話すと冥土帰しは眉をひそめた。そして俺達を匿うと提案までしてくれたのだ。自分達は発信機のようなものがあるので難しいのではと問うと、電波を防ぐような部屋があるらしい。

あまりの都合の良さに多少疑問が残るが、といって他にあてもない。素直に甘えることにした。

御坂美琴は双眼鏡を手に、とある研究所を覗いていた。研究所はSプロセッサ社脳神経応用分析所という場所であり、表向きでは筋ジストロフィーの病理研究を行っていることになっているが、実態は絶対能力者進化という悍ましい計画を行っている。

その計画を知った彼女は計画を破綻させようと関連施設の襲撃を行ってきた。手始めにネットワークを介したサイバーテロから始まり、直接襲撃まで及んだ。

この研究所は関連施設の最後の一基で昨晩襲撃しそこねた施設である。昨日は残る関連施設をニ基まで追い詰めたものの、襲撃した施設で警備していた暗部との交戦で消耗が激しかったため、昨日うちにまとめて襲撃できなかったからである。

昨晩の襲撃を考えると能力は完全に知られていると考えていい。そのためより強固な警備を行っているはずだ。だがそれでも止まるわけにはいかない。確実に潰すために偵察を行っているのだが……。

おかしい。人の出入りがない。さらに電気機器すら稼動していない。罠か？しかし、罠だとしても侵入して確認せざるを得ない。

意を決して施設に侵入してみる。しかし予想に反して全く抵抗はなかった。というより人が全くいない。機材も全てのデータが消去されていた。

もしかしてこれは撤退したのか？慌てて携帯端末で確認してみる。第七学区に本社を構えるSプロセッサ社が経営破綻し、筋ジストロフィーの病理研究をしていた施設が撤退したというニュースが流れ

ていた。

（やった……？やった？！）

昨日の攻防戦で継続を諦めたのか、一基だけでは計画を維持できないのかは分からない。分からないけど撤退まで追い込んだんだ――。

ここまで来るのに彼女はかなり無理をしてきた。通常の授業に加え、夜は寮の管理人に見つからずに抜け出し、施設の襲撃を行ってきたのだ。妹達が殺される夢を見てうなされては、睡眠もロクに取れていない。そして昨日の攻防戦。肉体の消耗は激しかった。それがやっと報われたのだ。

やらなければならないことはまだ沢山ある。計画が終わったあとの妹達の身柄をどうにかしなければいけない。けれど。

（妹達はもう……死ななくても……これで）

確定していた死は遠退いたはずだ。ようやく訪れた平穏。

安堵して寮に戻る。足取りは軽い。

「お姉様」

唐突の声。まさか――そんな――どうして――。どうして妹達がここにいる！？

混乱する美琴を前に声の主である００００００号はこう言った。

「計画はまだ終わっていないんだ。だから力を貸してほしい」

第二十二話（後書き）

感想を見てカエル医者の人気に驚きました。

次回は計画破綻作戦会議です。破綻させるにはどうすればいいでしょうか。

あとＰＶ２５万、お気に入り１０００件越えたようです。この場を借りてあつく御礼申し上げます。

物語は佳境です。今しばらくのお付き合いをお願いします。

第二十三話

「第一回ー。妹達を助けるためにはどうすればいいの？会議を始めますー」

「わーぱちぱち、とミサカは義理で拍手します」

義理言うな、義理とか。

「あんた達、こんな状況なのになんか脳天気ね」

はいそこ脱力しない、姉よ。

「僕も参加するのかい？」

今は一人でも力が必要なんです、先生――冥土帰しのことだ。

先生が用意してくれた部屋に俺、妹達１９人、お姉様、先生がいる。妹達をどうやったら救出できるのか、今後の行動方針を決めなければならない。まずは現状の認識からだ。

絶対能力者進化。最強の超能力者「一方通行」をまだ見ぬレベル６に進化させる計画。一方通行に経験を積ませることで進化する計画で、百二十八回もお姉様を戦闘及び殺害することで進化できるらしい。当然一人しかいないお姉様を殺害することは無理だ。その代用品として用意されたのが妹達である。二万人殺害すれば同様の結果を得られるそうだ。

経験による成長を調整するために戦闘はシナリオそって行われる。

そのシナリオは時間、対象、場所、そして殺され方まで決められている。もっとも時間は多少ずれても影響はない。実際、昨日が開始日だったそうだ。その上実験は検体番号順に行われるため、1号から始まる予定だったらしい。襲撃によって延期されたのだから、まさに間一髪だ。

「今後も施設襲撃は行ったほうがいいのかな?」

「施設を襲撃しても引き継ぎが行われるだけでしょう、たしか今度引き継いだ研究所は183施設に及ぶはずです。オリジナルのお姉様なら襲撃は可能ですが、根本的な解決にはなりません、とミサカは推測します」

たしかに襲撃している間に他の研究所で行われたら、どうしようもないか。183も同時に襲う戦力はない。ネットワークテロも対策を取られているだろう。

となると計画自体できなくする方法をとらざるを得ない。例えば一方通行の殺害。まあ殺害は行き過ぎかもしれないが、実験に協力しないように説得できないだろうか。しかし、一方通行のことはなにも知らない。

「誰か一方通行のことについて何か知ってるか?」

「一方通行に関しては能力すら不明です、とミサカは申し訳なさそうに答えます。実験は情報が制限されており、実験のスケジュールと自身の実験内容、過去の実験結果しか知る権利がありません、とミサカは報告します」

「これは一方通行の能力の正体を思考し様々なアプローチを行うことで、一方通行が得る経験を増大させる目的があります、とミサカは補足説明します」

「そのため、1号の代わりに他の妹達がすぐさま代わって実験を行うことはないでしょう、とミサカは断言します。例えばアサルトライフルで攻撃する実験を行う個体とアサルトライフルで牽制しつつ地雷へ誘導する実験を行う個体を交代させた場合、後者は事前にアサルトライフルが効かない可能性を知っているため、別の攻撃方法を模索します。そうなるとこの実験はアサルトライフルで牽制しつつ別アプローチを行う実験に変異します。これは演算した実験内容と異なる上、この経験が蓄積されるため、進化にどのような影響を及ぼすのか不明になるからです、とミサカは長々しい説明を行います」

「そのためしばらくはこちらの捜索を優先するでしょう、とミサカは考察します。ただ樹形図の設計者でスケジュールを再演算したり、新たに妹達を作られる可能性もありますが、使用申請や製造には時間がかかるため数日の余裕はあります、とミサカは推測します」

うーむ話しがそれたが、すぐに実験が開始されないのがわかったのはいいことだ。それにしても、全て樹形図の設計者によって予測演算された計画だからか、イレギュラーに弱いんだな。話を戻そう。

「お姉様や先生はなにか知ってないかな」

「僕は知らないなあ」

「書庫（バンク）で調べて能力はわかるけど聞いて呆れるわよ」

書庫はいわば能力者の情報などが載った総合データベースである。とはいえ、セキュリティがあって一般人は閲覧できず最低でも教師か風紀委員の権限が必要だ。つまりハッキングしたんですね、お姉様。しかし、能力がわかるなら弱点とか攻めて勝てないだろうか。妹達が負ける前提が崩れるし、頓挫するんじゃないか。

「一方通行の能力はベクトルの操作よ。運動量、熱量、電気量のあらゆる力の向きを触れた瞬間、任意に操作する能力なの。普段は重力や酸素とか必要最低限なものを除く全てのベクトルを反射するようにしているらしいわ」

ベクトル操作――反射となると、一方通行に向かって石を投げるとそのまま投げた力で返ってくるのか?!

「ということは」

「電気量や磁力を使う私達の能力では確実にやられるわ。樹形図の設計者も私と一方通行が戦闘した場合、１８５手で私が負ける結果を弾き出してるわ」

勝って研究を頓挫させるのは無理そうだな。というかなんてチートだろうか。能力発動は基本意識的に使われるか、身の危険を感じた時だ。意識せずに使えるとなると不意な奇襲や狙撃も使えないというわけか。攻撃しても反射されて無傷。なるほど最強だわ。

「仮に勝てたとしても樹形図の設計者で再演算し、計画は修正され継続されるでしょう、とミサカは予測します」

樹形図の設計者を利用してる分、計画に不具合が起これば再演算するため遅延はするが、継続してしまう問題もあるのか。

一方通行をなんとかするのは保留。ただ戦闘は無理ゲー。

別アプローチをしてみよう。妹達側はどうだろう。憑依前の世界はクローン製造は違法だったはずだ。クローン技術規制法だったか法律でも製造は禁止していたような。この世界ではどうだろうか。筋ジストロフィーの研究でクローン製造をごまかしてたんだそうだから、後ろめたいのは確実だろう。

「クローン製造の違法性をついて計画を頓挫できないかな？」

「たしかに違法だね」

「クローン製造は国際法に抵触するわ。けれど、実験は人間としては間違ってるけど、学者としては正しいのよ。例え法を破り重いリスクを背負って人の道から外れてでも、成し遂げるべき学術だってね。それに学園都市の法は統括理事会が握っている。そこが黙認しているんだもの。揉み消されて、捕まるわ」

ああそうだった。量産型能力者計画のときも統括理事会が凍結したりしてたな。そもそも樹形図の設計者の使用は理事会の承認が必要なわけだから使用する理由も知ってるわな。

「じゃあ学園都市外に逃げて真相をばらすのはどうかな？外から圧力をかけて計画を中止できないかな」

幸いこちらにはお姉様が見つけた研究のレポートとクローンの実物がある。これらがあれば、学園都市自体に圧力をかけてもらい、計画を中止させられないだろうか。

「無理ではないだろうね。学園都市を疎ましく思う者も少なくはない」

「ただ時間がかかるわね。それに学園都市は軍事的にも経済的にも他国を圧倒しているから、政治的な介入は難しいの。世論を動かすにも時間がかかるし、時間をかけすぎると証拠隠滅で妹達が犠牲になる可能性もあるわ」

案としては悪くはないが、時間がかかるのは厳しいな。

ならば統括理事会をなんとかできないだろうか。研究の予算を握ってるもの統括理事会だし、樹形図の設計者も統括理事会が関わっている。

「統括理事会をどうにかできないかな？例えば、計画の反対派を煽ってみたり」

「僕は仕事柄理事会の人間は知っているけどね。確かに反対しそうな人はいるよ。理事会の中では少数派だね。だからできることにも限界があるよ」

そっちも無理かあ。

あれ、軽く詰んでね？

第二十三話（後書き）

多分批判が多いと思いますが、アサルトライフルのくだりは強引な説明です。

第二十四話

「ん？でも待てよ。さっき実験内容を知ったら再演算するって言ったよな。ということは樹形図の設計者を破壊した後、ネットワークで他の妹達に実験内容を知らせたら、再演算できなくなって、計画は中止にできるんじゃないか？」

樹形図の設計者はたしか安全のため人工衛星に載せられ、今は宇宙にある。だから衛星を操作し衛星を落としたりして壊せないか。

「確かに演算し直せなくなれば、できるかもしれないわね」

お、これはいけそうか。

「計画はまだ始まってないんだよね？もしそうなったら一度新しく妹達を造り出して、計画をやり直すんじゃないのかい？」

……もし造り直すとしたら、今までの妹達は処分するだろう。まだ全体の1割ほどしかいない妹達だから、十分に有り得る。この作戦も却下。

「計画がなくなったら、僕の介入の余地もあるんだけどね。計画を潰す方法は他にはないかい？」

先生がいうには、計画さえなければ妹達の利用価値がなくなり身柄の確保がしやすいらしい。ようは先生の研究に妹達を加えるということだ。だがしかし計画を潰すと言ってもなあ。

直接の襲撃はダメ――一基襲うのは簡単だが、研究は他の研究所

に引き継がれる。また二百近い研究所を襲うだけの戦力がない。

一方通行との戦闘はダメ――――チートスキルで勝てない。説得は居場所不明。

学園都市の外に出て圧力をかけるのは不可能ではないが時間がかかるため保留。証拠はあるので一番可能性があるし、お姉様の襲撃を揉み消したことから見ても公表は憚れるらしい。逆にいえば少なくとも学園都市内の報道統制は完璧だってことだけど。

統括理事会の反対派はいるみたいだが、協力は得られなさそう。なにか今までで見落としがないか？

会議では結局決まらず、各自で案を考えてまた会議する予定だ。今は別室で一人考えている。しかしここまで状況が悪いとは。それに比べてこちらの手持ちのカードが少ない。

手持ちのカードは２０人の妹達、計画のレポート、レベル５のお姉様、先生の存在だけだ。なにか他にカードがあれば状況は変わってくると思うんだけど。

「あんた、こんなところにいたの」

ぼんやり考えているとお姉様が話しかけてきた。気付かない間に入室したようだ。

「ああ、うん。なかなか考えがまとまらなくてね、お姉様はなにか思い付いた？」

「残念ながらね」

学園都市屈指の頭脳を持つお姉様でもダメか。

「ねぇ」

「うん？どうしたの？」

「あんたは私の事を恨んでないの？」

「ん？どうして？」

「だって私がＤＮＡマップを安易に渡さなければ、こんなことにはならなかったはずよ。こんな命を弄ぶような実験……ッ！」

「元々お姉様は騙されただけなんだろ。筋ジストロフィーとかいう病気を治すために提供したんだよな。だったら騙した研究者が悪いんじゃね」

「でも……」

「まあなんつーか理不尽な現実には愚痴は言いたくなるけど、お姉様をどうこう思う気はないかな。どっちかってーと、クローンだから気味悪がられるんじゃないかって思ってた」

本来この件はお姉様は介入しなくてもおかしくない。自分のクローンが殺されるのは気味悪いかもしれないが、お姉様自身に影響は全

くないはずだ。

それでも彼女は介入し、妹達を助けようとした。若さによる青臭い正義感なのかもしれない、罪悪感や責任感なのかもしれない。しかし彼女の行動はほんの少しでも確実に妹達の命を守ったのである。

「だから、助けようとしてくれて嬉しかった。力を貸してくれてありがとう」

「――――ッ！」

……ちょっと臭かったかね。なんだか陳腐なドラマみたいだな。恥ずかしくて顔が熱くなる。

「……姉を泣かせるんじゃないわよ、バカ」

……俯きながらお姉様がデレた。もしかすると所謂ツンデレ系な姉なのかもしれない。

覚悟を決めた――――。

少し目元が赤くなりつつ美琴は思う。

００００００号と出会い、まだ計画が終わってないことを知って、心は折れかけた。しかし、まだ懸命に生きようと足掻く彼女を見て、そして頼られてその責の重さを感じはしたが、その分救われた気が

した。

妹達は自分を責めようとはしない。生み出してしまった責任は間違いなく自分にある。その罪悪感から、むしろ責められたかった。だから頼られたときはその罪を少しでも購えると思ったのだ。

しかしそう簡単に解決できる問題ではない。結局会議は中断し、各自考え直すことになった。頼られた結果がこれでは会わす顔がない。しかしなにも思い付かない。少しいたたまれない気持ちになりながら一人になろうとして入った部屋に彼女はいた。

妹達の中でも感情を持つ例外な彼女。彼女自身は自分のことをどう思っているのだろうか？こんな時になにを考えているのか――と冷静な部分では自分を叱責したくなるが気になって考えがまとまらない。結局意を決して聞いてみることにした。

結果は想定外だった。恨まれるどころかありがとうとまで言われたのだ。計画を知ったあとは何度も悪夢を見てその度に妹達に責められた。だが現実は全く違う。自分は赦されたのか。心が軽くなる。思わず涙が頬を伝う。だが彼女には見せたくない。何故なら彼女は――彼女たちは自分の妹なのだから。俯いて意地でも涙を見せないように平静を装った……つもりだ。

彼女達をなんとしてでも助ける。でもどうすればいいのか。計画の首謀者を見つけ出して締め上げる？いや学園都市の上層部が支持している以上、計画は継続するだろう。誰だ？こんなイカれた計画を考えたのは？

――樹形図の設計者か！学園都市が誇る世界一の演算能力を持つ超高度並列演算処理器。あれを破壊すれば学園都市もあとには退け

なくなる。しかしただ破壊するだけではダメだ。どうすればいい？

さっき実験に調整された妹達が実験内容を知ることで再演算されると聞いた。しかし妹達がそれをしたところで、代わりがいるため、計画は続行するだろう。――ならば代わりのきかないものだとしたら？

一方通行。こいつしかレベル６になれないのだからこいつをどうにかすればいい。例えば交戦。計画はあくまで妹達と現状の一方通行だけで想定されたものだ。だからレベル５である自分が一方通行と戦えば？コントロールされた戦闘とは違い、大幅な歪みが発生するのではないか。

一方通行と超電磁砲が交戦し致命的なエラーが発生したため、計画の修復は不可能であり一方通行のレベル６への進化は不可能である――という内容の予言を吐かせればいい。勿論こんな都合のいい予言は普通でない。ハッキングして嘘の予言を吐かせ、破壊する。そうすれば分析を樹形図の設計者に頼っている研究者は、計画を継続できなくなる。

勿論自分もただでは済まないだろう。樹形図の設計者を破壊すれば間違いなく捕まるはずだ。だが覚悟は決まった。

まずは一方通行と交戦した事実をつくらなくてはならない。もしかすると説得で済むかもしれないが。となると居場所を知らなくてはならない。書庫に再アクセスするか、研究所を襲撃すればわかるはずだ。

再び考え始めた００００００号を残し、美琴は部屋をあとにした。

第二十四話（後書き）

私事で恐縮ですが

医者「僕の研究の為に、採血して魔法し……遺伝子提供してよ！」

そういう話しがあった時、なんかタイムリーなネタだなと思いました。

第二十五話

とある研究所の一室。一人の外国人の男が椅子に座り、爪を切っていた。足音が聞こえ扉に視線が動く。荒々しくドアが開けられる。

「ハロー。どうしました?そんなに血相を変えテ、ドクター天井」

入ってきた男は天井亜雄。片言の男の指摘通り血相を変えて、急いできたのか肩で息をしていた。

「ハローじゃない!何だこの引き継ぎ施設の数は!?」

正体不明の襲撃者によって研究所が閉鎖に陥り、絶対能力者進化実験が一時中断した。そのため、研究を他の研究所に引き継がせざるを得ない。天井は研究で発生する利権が分散するデメリットに目をつむり、研究の引き継ぎに渋々同意した。

その際、外部との折衝を行ったのは、この研究の責任者であるこの片言の男だ。天井自身あまり交渉事に向いていないことを自覚していた。そのため彼に引き継ぎに関する折衝を一任したのである。

引き継ぎ施設その数一八三基。いくら何でも有り得ない。これでは利権の全てを外部の連中に貪り食われるだけではないか!

「確かに引き継ぎ自体は承認したがな!こんなに利権を分散したら」

利権が殆ど得られないではないか!という前に片言の男が言葉を遮る。

「まァまァ落ち着いテ。これくらい分散したところで利益は十分出

ますヨ」

む……と言葉を飲み込み考える。確かにレベル6を生み出すことができれば莫大な利権が生まれるだろう。多少分散しても十分な利益は得られるがやはり二百近い分散は多過ぎる。

「今一番重要なのは樹形図の設計者が保証した実験を完遂する事でス」

まだ襲撃犯は捕まっていない。だから実験がまた妨害される可能性がある。しかしこれだけの数に研究を引き継がせれば、妨害されても実験を進行することができるはずだ。

「それに彼等と交わした契約書には裏がありましてね。利権を得られるのハ、計画終了時点で実験を行えるだけの機能を維持している研究所だけでス」

契約書には様々な取り決めがされていた。研究の機材の準備、費用は引き継ぎ先で持つこと。また、研究所を襲撃されようとこちらは一切責任を持たないということなどだ。つまりは研究所が襲われれば襲われるだけ、利権の分散を防ぐことができる。

「これで謎の襲撃者の心が折れるならそれで良し。足掻けば足掻くだけ我々の懐が潤う計算でス」

成る程、一理ある……のか？天井は首を捻りながら考える。最も片言の男が言外に込めた意味には気付いていない。

この契約は計画終了時点で実験を行えるだけの機能を維持している

研究所のみ利権が与えられる。ならば機能を失えば、利用するだけ利用しただけで損失はゼロだ。例えば何らかの事故で機材が焼失したり、研究データが消されたり、正体不明の襲撃者が襲撃に成功すれば利権は得られなくなる。

天井の気付いていない表情で悟り、呆れる。

（ヤレヤレ、ドクター天井も研究者としては優秀なんですがねェ）

研究者にも色々なタイプがいる。天井は研究以外では知識が疎く、上手く立ち回れないタイプだ。

（まぁその方が私としては与しやすいですガ）

片言の男は内心でニヤリと笑った。

「それより、計画の進行が遅れテいることが問題でス」

「ああ、それはスケジュールを調整し直した。残りの妹達の製造を早めるように指示を出している。問題ない」

襲撃と引き継ぎの関係で実験の開始が遅れている。実験を短縮するため、実験の合間を詰めスケジュールを調整し直したのだ。結果、妹達の製造を早めることになった。

以前は研究所の妹達の生産ラインや収容数の関係で本来一ヶ月に２０００～３０００体程度が限界であったが、研究所の引き継ぎに伴い、残った全ての妹達を製造し管理できるようになった。事実すでに各施設では一万八千もの妹達の培養をはじめている。

「逃亡した妹達も問題だ。造り直して計画を始めるにしろ、捕獲にしろ処分しないといけない。できれば貴重なサンプルである０００００号だけは捕獲したいが」

ネットワークから消失した妹達の追跡は難航している。地下に逃走したようだがまだ見つからない。

「確か、探索に割ける人員が不足しテいるんでスよね？」

「そうらしいな」

探索は人海戦術だ。人がいなければ当然効率が悪くなる。壁で覆われた学園都市から逃げられないとはいえ、学園都市自体も広大だ。

「なら話しは簡単でス。探索班に妹達を加えれバいい」

「！？しかし、逃亡する可能性が！？」

「勿論妹達の監視を付けてでス。今までの人員を監視役に回せバいい」

――妹達の不始末は妹達につけさせればいいのだ。

「お姉様、そろそろ時間ですが、とミサカは注意を促します」

ああー結局なにも思い付かなかったな……どうしたもんだか。

「そう言えばオリジナルのお姉様がどこにもいないようなのですが、なにか知りませんか、とミサカは問い掛けます」

「あれ？んなバカな。門限の時間……ではないよなあ。用事があるなら言うだろうし」

んーどうしたんだ？さっきの感じだと、黙って帰るなんて有り得な……！？まさか何か思い付いたのか！？黙って出たってことは、自分一人で危険なことをやるつもりかもしれない！！杞憂で済めばいいけど、嫌な予感がする！

「まずいな、お姉様を探しに行ってくる！お前達は待機しててくれ！」

まだ時間はそんなに経っていない。お姉様、無茶はしないでいてくれよ！

第二十六話

まだ夕方だから人通りもそれなりにある。お姉様がいなくなって時間があまり経っていないからすぐに見つかるかと思ったけど、この中からお姉様を見つけるのは非常に困難だ。ネットワークの存在があるから、追っ手がきても対処できるように俺のみ出てきたけど早まったか？ああもうネットワークで妨害できればいいのに！

……あ、そうか！自分の能力で電磁波の膜みたいなものを造りネットワークの電波を遮断すればいいのか！なんで単純なことに気付かなかったんだろう。発電能力応用力高すぎだよな。

……できるにはできた。思ったより消耗が激しい。使い続けるとなると妹達じゃすぐに電池切れを引き起こすかもしれない。やはり俺一人でいくしかないか。早く見つかるといいんだが。

携帯端末を操作し、書庫にハッキングする。セキュリティは高いがレベル５である美琴にしてみれば無いも同然だ。調べるのは一方通行の情報。――あった。住所もわかる。あとは本人に会うだけだ。

調べたマンションに一方通行はいなかった。まさかもう実験は始まっているんじゃないか？と一瞬不安に過ぎったが、妹達の話が正しければそれは有り得ないだろうと考え直し、ただ出掛けているだけだと判断する。待っていてもよかったのだが元々気が短い美琴は周辺を探すことにした。

河原。高架下の陰に一人の少年がいた。短髪で白髪、肌は白く、線が細いので一見少女のようにも見えるが、やはり少年である。爛々と輝くような赤い瞳はただ気だるげに地面にはいつくばる男達に向けられていた。

「オイオイ、もう降参ですかァ。これだけ弱い雑魚のクセになンでこの俺に喧嘩売ってきてるンですかァ」

男達は誰ひとりとして無事ではない。大半が虫の息で意識を保っている者は少数だ。頭や手足を怪我して血を流している者ばかりであり、中には武器として持ってきたであろうバットはひしゃげ、その持った腕ですらあらぬ方向に曲がった者、地面に使われていた筈のコンクリートが破片になって突き刺さっている者もいる。

「ひぃッ……！」

他の者に比べ幾分か軽傷――といっても頭から血を流し、左腕は脱臼しているようだが、の男は完全に怯えきって少年から逃れようと必死だ。しかしその思いも虚しく腰が抜けているせいか力が上手く入らず不様に足をばたばたとさせることしかできない。

「あン？自分だけ逃げるつもりかよォ。というか喧嘩売っておいて逃げられると本気で思ってるならおめでてェな」

そういって近寄ってくる恐怖の象徴に男は意識を保つことはできな

った。

「チッ……！」

少年は男を一瞥したあと舌打ちし、傍に置いていたコンビニのビニール袋を拾い上げる。袋には一杯の缶コーヒーが入っていた。

元々少年は近所のコンビニで缶コーヒーを買うつもりで出掛けたのだったが目新しいものが無かった。そのため他のコンビニまで遠出したのだった。袋の中身の缶コーヒーはどれとして同じ製品はない。学園都市は実験都市だ。それは飲料や他の日用品にも当て嵌まり、外では見かけないような新製品も多くある。そのため自販機やコンビニで全く違う商品が並んでいることも珍しくはない。

で遠出した結果がこの惨状である。もっともこの光景はいつものことだ。大概は今回と同じように徒党を組んで襲ってくる。そしてその全てを返り討ちにするのだ。何一つ例外はない。変わらない現状に少年はウンザリしていた。

彼の名は一方通行。学園都市のたった七人しかいないレベル５の第一位。レベル５には序列があり、能力の強さだけではなく能力の希少性や研究としての価値も含めて決められている。だが彼は希少性や価値もさることながら、純粋な能力の強さで他のレベル５を圧倒していた。まさしく学園都市の『最強』の能力者なのである。

しかし最強という称号は争乱を引き起こす呪いに過ぎなかった。

超能力者に憧れ学園都市を訪れる者は少なくない。脳の調整を行えば簡単に奇跡のような技が身につくのだ。自分ならひょっとしたらすごい能力が眠っているのではないか？そう可能性を信じて疑わな

い、いや夢見て訪れる。――――そして現実を知るのだ。

能力者の大半はレベル1かレベル0である。当然訪れた者もレベル1や0になるものが大半になる。しかし学園都市ではレベル3からがエリート扱いであり、事実上位の学校では入校の条件にレベル3以上であることが必須条件に含まれる位だ。つまり、学園都市ではその者達は無価値――――落ちこぼれと分類されるのである。

そんな彼等はどうなるのか。大半はカリキュラムに勤しみ能力が上げようと努力するだろう。しかし努力が実らないと感じたときどうなるだろうか?結果、夢を諦め、能力があるものを妬む。

これは彼等だけではない。レベル5と分類されなかった能力者も同様だ。研究の利用価値がないと判断されたものや進化できないと感じたとき同じ状態に陥る。

それがきっかけになり、スキルアウトと呼ばれる無能力者の不良集団になったり、学園都市内で犯罪を起こすのだ。

そうした彼等は能力ある者を憎む。学園都市最強の超能力者――――その肩書は憎しみの矛先が向けられるのに十分な理由だった。単純に最強を倒すことで名声を得ようとする者、研究者や能力者を見返そうとする者、最強に成り代わろうとする者、様々な理由を抱えた暴力が一方通行に向けられるのだ。

その度に相手の心が折れるまで叩き潰す。それが彼のやり方だ。元々幼い頃から非人道な実験を繰り返してきたし、今更自分が善人ぶる必要はない。だがこんなことが繰り返されるとウンザリするのだ。最強になれば解放されると思っていた。しかし環境は何一つ変わっていない。『最強』止まりではダメだ。もっと超越した何かになら

なければ――挑むことさえ馬鹿らしくなるような無敵の存在にならなければ変えられない。

そう考えていると缶コーヒーが落ちた。ビニール袋が破れていることに気付く。どうやら先の争い中に誤って破片か何かが当たったらしい。こんなことならば、持っておいて反射するように設定すればよかったと思い、一方通行は舌打ちする。そして拾おうとし転がったほうに目を向ける。すると先に拾い上げる手が見えた。拾い上げたのは一人の少女だった。

お姉様見つからねーてかここどこよ？土地勘もなしに出かけるもんじゃないね。お姉様を見つけないと病院まで無事戻れるんだろうか……。まさかの迷子フラグに途方に暮れる。お姉様ー早く来てくれー！あれ、なんか趣旨が変わったような。

橋の傍の階段を降りる。カランと何か落ちたような音。転がってきたのは缶コーヒー？空き缶はゴミ箱へ！てこんなことしてる場合じゃないな。と思ったけど空き缶じゃないやこれ。てか漢の浪漫コーヒーって。どんな味するんだ？

「おィ」

声をかけられたほうに顔を向ける。そこには白髪の男がいた。なんというかあれだな。風体がチンピラモヤシだな。うん。

周りが血だらけな男や有り得ない方向に曲がった腕やら橋の柱に向かって犬神家してる奴がいるようなバイオレンスな世界を視界にお

さめながら、そう失礼なことを考えていた。

絶対コレ面倒事フラグだ！

第二十七話

右手に缶を左胸は早鐘を。回る世界はバイオレンス。

いやはや周りにたくさんいる重傷者は多分あのチンピラモヤシにやられたんだろうけど。放置するとヤバくね。

「おィ」

なんですかチンピラモヤシさん。そんなモヤシさんの手には破れたコンビニ袋。それと辺りには沢山の缶コーヒーが散らばっていた。どうやらこの缶コーヒーは彼のものらしい。

「えっと……コレ」

男の浪漫コーヒーを手渡す。微妙な空気になりながらも男は黙って受け取った。ついでに他のも拾い上げるのを手伝う。どれもこれも微妙な商品名だ。スーパーでも変な商品を見かけたけど売上的に大丈夫なんだろうか。とにかく空気が重いので適当に片付けたら逃げよう。

全て二人で拾い上げる。よし逃げよう。あと重傷者のために人呼ばないと。携帯も無いし、警備員や風紀委員にバレると面倒だけどほって置けない。

「おィ、お前超電磁砲か？」

……どうやらお姉様のことを知っているらしい。女子校のお姉様がこの男と知り合いは考えにくいけど、お姉様は有名人だからなあ。

ファンとかなにかかな？友達だったらお姉様の交遊関係はある意味すごい。

「いや違う。……妹だ」

迷ったけど下手にごまかしても意味なさそうだしな。

「妹？……ひょっとして実験の関係者か？」

実験の関係者……思い付くのはあの計画。実験を知っているってことは関係者か？！一気に警戒レベルを上げる。いつでも逃げられるように身構えた。

「……あんた誰だ？」

「聞いてねェのかァ。これから二万回も面倒臭ェ実験に付き合う仲なのによォ」

――実験に付き合う――てことはこいつ、一方通行か！？

「で、実験は延期してるはずなのに、なンで妹達が屋外にいるンだァ？」

この口ぶりから察するに一方通行は実験を知っている。あんな非道な実験に協力するつもりらしい。

「……どうして」

「あン？」

「どうしてあんな実験に協力しようとするんだよ！あんた学園都市どころか世界でも最強の能力なんだろ！？だったら無理にあんな実験に参加しなくったっていいじゃないか！」

これだけ沢山の男に囲まれても勝てる実力。実際軍や国を相手にしても勝つような実力なんだ。だったらレベル５のままでも十分じゃないか。

「そりゃあ、絶対的なチカラを手にするため。レベル５だとか学園都市で一位だとか、そンなつまンねェもんじゃねェ」

一方通行が男達を一瞥する。

「コイツら見てみろ。学園都市最強の座を狙って突っ掛かってくるバカどもだ。つまり最強程度じゃこンなバカどもが遊び半分で挑ンでこようと考える。それじゃダメだよなァ」

右手を突き出し虚空に掲げ拳を握る。まるで届かない目標を掴むような仕草だ。

「俺に挑もうと思う事すら許さねえ程の絶対的なチカラ。『無敵（レベル６）』が欲しーンだよ」

……そんなことの為に妹達は犠牲になるのか！沸々と怒りが沸き上がってくる。けどそれと同時に何故かこいつは戦いたくないんじゃないかと思った。実験に参加してることや周りの惨状を見れば何言っているんだと思うけど。なんか単純に受け取れば戦いたくないから強くなろうとしてるように聞こえた。そう思うと怒りが収まってくる。

「なあ……ほんとに絶対的なチカラを手に入れたら、誰も挑まなくなるのか？」

「あァ？」

「結局手に入れたって今と変わらないんじゃないか？最強になった時だって変われたのか？」

「……」

「だって今やろうとすることは研究者が用意した実験に過ぎないんだぞ。そんな他人が用意したモンで周りは変わるのか？自分だけが変わっても意味がないだろ？周りと一緒に変わらなきゃ、変えていかなきゃ何も変わらないんじゃないか？」

なかなか変えられなくて困ってるのが現状だしな。妹達が人扱いされない事、実験の事。

「例え変わる可能性があったとしても、二万人もの妹達を殺していいってことじゃないだろ！俺達はお前に殺される為に生まれたんじゃない！」

思わず叫んでしまった。怒りを抑えきれなかったらしい。

「なに……？」

黙っていた一方通行が急にほんの少しだが表情を変えた。……？この反応もしかして……知っていなかった？かい摘まんで俺が知っていることを話す。

全部を聞いたあと一方通行は笑いはじめた。

「ククク、ハーッハッハッハ！！！！」

口を歪ませるほど楽しくて仕方ない。そんな表情をしながら、ただひたすらわらう。

自分は善人ではない。むしろ対極にいるにいる悪党だと一方通行は自覚している。だからこそ、悪党に相応しいこんなクソッタレな計画の内容を知ってわらいが止まらなかった。

一方通行が計画の参加を持ち掛けられたのは一ヶ月ほど前だ。その時もまた今の状況に似ていた。いつものように最強の座を狙うバカどもと一戦終えたところに声をかけられた。大概自分に近付いてくるのは前述のバカか、自分を研究して甘い汁を吸おうとするくだらないヤツらばかりだ。そんな話に興味など沸かない。だから今回も断るつもりだった。

だが今回は違った。

「『最強』どまりでは君を取り巻く環境はずっとそのままだろうね」

声をかけてきたサングラスの男はこう言ってきたのだ。そして『最強』の先『絶対能力』が環境の変化を齎すかもしれないとも。更なる高みに興味が沸けば連絡してほしいと言い残し男は去った。

一方通行が連絡を入れるのに時間はかからなかった。

連れてこられた研究所で見たもの。それは沢山の培養器で製造されている少女たち――超電磁砲のクローンである妹達だった。

国際法で禁止されているクローンを大量生産するなどハナからまともな実験ではないだろう。類は友を呼ぶというが悪党は悪党を呼んだということか。

だが内容としては拍子抜けするようなものだった。二万通りの戦場を用意して二万のクローンと戦闘するだけという内容。一方通行はただひたすら戦うだけだ。

だが始めようとした時に事故があったらしく、実験は延期。再開する際に連絡がくるはずだった。

クソッタレな外道が関わる実験だ。ただの実験じゃない。心の中ではそう思っていたが、二万体を殺害すると聞いてわらわずにはいられなかった。

――やはり悪党は悪党でしかないのだ。

なんで笑ってるんだ、こいつ？どうしていいかわからなくて苛々としてくる。

「イイねェイイねェ！ハハハ！！！」

最高にハイな状態になってる一方通行。できれば関わりたくない。が関わらないわけにもいかないか。

実験の詳細までは知らされていなかったらしい。もしかすると説得可能かも。

「なにがおかしいのかわからんが、実験の事、知らなかったのか？だったらこんな実験に協力しないでくれないか。頼むから妹達の命を助けてほしい。お願いだ」

一方通行が実験に参加しなければ計画は成立しない。そうなればこの時点でこの話は終わるんだ。頼む！叶ってくれ！

笑いをやめ、一方通行がこちらに視線を送る。

答えは――――。

第二十七話（後書き）

携帯でわらうの難しいほうの漢字が出ないので平仮名です。

なんか一方通行さんは口調さえ気をつければ一番書いてて楽しいキャラですね。原作でも好きなキャラですが。

第二十八話

答えは――――。

待っている間の静寂が重苦しい。これ次第で大きく運命が変わるから当然か。

しかしその静寂はほんの僅かの間だけだった。

はぁはぁはぁ。ここまで逃げれば大丈夫だろうか。キョロキョロと辺りを見回す。今のところ人の気配はない。一息つき壁にもたれ掛かる。

一方通行と話している時ふと人の気配に気付いて見てみるとスーツ姿の男達が取り囲んでいた。一方通行目当てではなく、どうやら俺が目当てのようで一斉に取り抑えにきた。どうやら追っ手のようだ。なんとかかわし、手の平の電撃をまばゆく発光させ、男達の目を眩ませたあと逃げ出してきたのだ。

しかしなんて間が悪いんだろう。こんなタイミングで来なくてもいいのに。――――答え聞けなかったな。一方通行が実験に参加しなければ、妹達を助けられるかもしれないのに。

けど可能性が無いわけじゃない。もう一度接触しないと。しかし今回の件でこの周辺は警戒されただろう。悔しいがほとぼりが冷める

までは大人しくしたほうが良さそうだ。……それにしてもお姉様はどこに行ったんだろう？

スーツ姿の男達が少女を追い掛けていき一人残された一方通行は帰路につく傍ら、電話をかける。長い呼び出し音のあとに電話に出たのは女性の声だった。

「あら、あなたから電話をかけてくるなんて珍しいわね。実験再開の日程は事故のせいでまだ未定よ？」

「あァ？オマエラの不手際が原因だろうが。だいたい妹達が逃げ出したなンて、管理もロクに出来てなくて大丈夫ですかァ？」

「！？……どこでそれを」

「さっき見かけたからな。それより実験でクローンを殺害する事をなンで黙ってた？」

息を飲む音。しばらく沈黙が流れた。

「そう知ってしまったのね……」

「しかもレベル５のクローンと戦えるからテンション上げてたのに、レベル３の雑魚に過ぎないんだろ？二万回もお人形さン遊びするような歳じゃないンだぜ？」

「オリジナルとの性能差は否めないわ。その代わり銃器で武装させるし、彼女達はネットワークで記憶を共有できるから実験を行う度に学習し進化していくわ。経験を積んで強くなるはずよ」

「どちらにしても俺に黙ってたってのが気に入らねェ。なンなら計画を潰したっていいンだぞ？」

静かな威圧。それは電話越しでも伝わっただろう。

「……そう。たしかにあなたの協力が無くなれば、実験はできなくなるわ。……まあどちらにしても彼女達は助からないけれど」

「あァ？」

「元々彼女達はレベル５を量産する計画が失敗して、この計画に組み込まれた存在よ。だから実験が無くなった場合、処分されるでしょうね」

日も暮れ、最早人通りも無くなってきた公園のベンチに座りコーヒーを飲む――さっきクローンが拾い上げた缶コーヒーの一つだ。それは今の心境を表すかのように後味の悪い。

例え自分が実験を辞めようと何も変わらないのだ。すでに２０００のクローンが存在し、今１８０００もの個体を製造しているらしい。ただこの実験のためだけに生み出された存在――ただ一方通行に

殺されるためだけに生み出された存在なのだ。もし実験を今辞めれば、存在意義を無くし処分されるのだから、寧ろ彼女達の生存時間を縮める結果にしかならない。

どちらにしても既に二万の命の重みを背負っていたのだった。

（今やろうとすることは研究者が用意した実験に過ぎないんだぞ。そんな他人が用意したモンで周りは変わるのか？）

あのクローンの言葉が響く。この実験も今までの実験と何ら変わらない。研究者が敷いたレールを進んでいるに過ぎないのだ。そのレールから抜け出すことが出来ずにいる。だからあのクローンの言うようにどんなに犠牲を払っても今までと同じで何も変わらないのではないのだろうか。

だがしかし。どうすればいいと言うのだろう。クローン達を救うのか？悪党である自分が？今更ヒーローにでも成り代わるつもりか？

それはない。自分はヒーローにはなれない。悪事に手を染め続けた自分ではヒーローにはなりえない。何も変えることのできないヒーローなんて必要はない。――そう自嘲した。

ならば突き進む。例えそれが手を汚す結果になろうとも、その罪を背負う。悪党は悪党で居続けなくてはならない。

「アンタ、一方通行よね？」

今日はつくづく来客が多い。しかも先程の少女と全く同じ顔だ。違うところと言えばゴーグルがあるかないかぐらいだろうか。

「お前クローンか？オリジナルか？」

それを聞いた少女は元々剣呑な顔をより厳しいものに変えた。

「オリジナルよ！アンタやっぱり実験のことを知っているのね！」

「あァ、オマエのクローンには世話になるンだぜ。俺の無敵化を手伝ってくれてンだ。感謝しなきゃな」

「フザケんじゃないわよ！あの子達はアンタに殺される為に生まれてきたんじゃないわ！」

（俺達はお前に殺される為に生まれたんじゃない！）

クローンとの言葉が重なる。容姿だけじゃなく考えも瓜二つだと感じていた。

「オイオイ、人聞きの悪ィな。人殺し見てェな事言うなよ。俺が相手にするのはボタン一つで造れるオマエの模造品だぜ。人形に何ムキになってンだ？」

そういって一方通行はニヤリとわらった。少女の怒りに呼応するかのように、全身から電撃か瞬き始める。

「それ以上あの子達を侮辱するなぁぁぁぁぁ！！！！！」

その言葉と同時に少女の体から発せられた幾筋もの雷撃が一方通行を襲う。しかし一方通行に接触するか否かの時点で、不自然に雷撃が曲がった。まるで一方通行を避けるように。

それが彼の能力。ベクトル操作。学園都市最強の力。

「なンだ、同じレベル5というから期待してたンだが、大したことねェな。ほンとにオマエ常盤台の超電磁砲かァ？」

否と答えるかのように、少女――美琴は攻撃の手を休めない。事前に相手の能力は調べてある。自身の能力が通用しないことは十分に想定済みだった。

美琴が地面を蹴る。すると黒い砂鉄が舞い上がった。砂鉄は渦を巻きはじめ竜巻と化し、一方通行を飲み込んだ。砂鉄の嵐に飲み込まれれば対象はズタズタに引き裂かれる。しかしそれは普通ならばだが。

「ふーン、磁力で砂鉄を操ってンのか。おもしれェ使い方だ」

相手は普通ではない一方通行だ。その嵐の中ですら平然として能力の分析まで行う余裕がある。

「ま、タネが割れたらどうって事ねェよな」

嵐の中で渦の流れを演算し、ベクトルで操作する。途端に嵐は止み只の砂鉄に戻り舞い散った。

これも通用しない――事前に能力を知ってはいるが、全力を出し

ても悉く通用しない現実を美琴は苦々しく思った。元々の目的はこのまま続ければ達成できるだろう。しかし妹達を嘲笑った一方通行に一撃を入れなければ。そうでないと怒りが収まらない。そう思って全力で攻撃しているのに、一撃を入れることすらできない。それ程までに第三位と第一位とでは遠いのか！

ポケットからコインを取り出し、構える。そして親指で弾いたコインが一条の光となって一方通行を貫く！これが第三位の代名詞ともなった超電磁砲――――！

一方通行を貫くはずだったコインが美琴の頬を掠めた。それは一方通行の反射。何物も通さない絶対防御。それは超電磁砲も例外ではなかった。

「さて」

自分の絶対的に信頼していた技をいともたやすく反射され、一瞬呆ける美琴に一方通行が声をかける。

「次はこっちの番だ。そのザマじゃあンま期待できねェが、ちったあ楽しませてくれよな三下ァ」

第二十九話

一方通行が地面を蹴ると美琴の間合いを一瞬で詰め、腕を掴む。

「!?しまっ……」

「捕まえたァ」

ニィと笑うと美琴をぶん投げ地面に叩きつけた。

「くはッ……!」

受け身も取れず背中から地面に叩きつけられたため、一時的に呼吸ができなくなる美琴。しかし、相手は最強だ。追撃に備えて素早く身を起こす。

「さっきの砂嵐は面白かったなァ。たしかこンな技だったか?」

また地面を一蹴りすると今度は竜巻が起こる。最も先程美琴が起こした倍ほどの大きさがあり、砂鉄だけではなく砂利や砂も含まれたものだ。それが美琴に牙を向けた。

かわすのは不可能だ。ならば相殺して少しでも威力を弱める。美琴は素早く演算し、大地を蹴る。先程と同程度の竜巻ができ、一方通行の竜巻の進路を遮った。

互いの竜巻が接触し押し負けつつも美琴の竜巻は一方通行の竜巻の進行を遅らせることに成功した。とはいえ一時的なもので想定通り美琴が創った竜巻は押し負け飲み込まれて散る。想定外なことに殆

ど勢いが衰えてはいない。しかし時間を稼げたお陰で街灯を目掛けて磁力による移動を使い竜巻の進路から離脱できた。そのまま竜巻は樹木をへし折り巻き上げながら進んで自然消滅した。

間違いなくあれを喰らえば無事では済まなかっただろう。ぞっとする。攻撃の手を休めればそれ以上の苛烈な攻撃が襲って来るだろう。

街灯やベンチなど近場にあったものを磁力で操作し一方通行に向けて投げつける。とにかく隙を作らせない。だが一方通行に当たりそうになると街灯は折れ曲がり、ベンチは砕けた。

「もうネタ切れかァ？大したことなさすぎンだろ」

息切れを起こし始めている美琴と比べて一方通行は全く消耗した気配がない。先程までの興奮や楽しいといった感情が抜け落ち、顔に残ったのは落胆。

「もういい。飽きた。とっとと止め刺してやンよ」

そこからは一方的な蹂躙だった。美琴も反撃はするが、どの攻撃も一方通行には届かない。逆に攻撃を反射され、それが牙を向けてきたり、近辺の街灯などを投げつけてきたり、先程のように掴まれ投げ飛ばされたり、蹴り殴られた。

美琴はそれでも諦めずに何度も立ち上がり攻撃するが次第に反撃できなくなっていき、立っている時間も短くなっていた。

「ッ――――！！！」

美琴は声にならない悲鳴をあげる。一方通行は地に伏した美琴の髪を掴み上げたからだ。もう傷が無い所はない。服はボロボロ、手足は切り傷や打撲ができ、鼻や口からも血が流れまともに呼吸すらできていないだろう。

最早彼女に反撃するだけの力はない。能力はすでに限界を終えていて使えない。最も演算を必須とする超能力では今の意識が朦朧とした状況で使えないだろうが。

重力を操作し美琴を掴み上げたまま跳ぶ。自重に髪の一部がぶちぶちとちぎれるがまだ美琴を支えていた。そして一方通行はある程度跳び上がるとパッと手を離した。

ドサリ――――地に落ちた美琴はピクリとも動かない。ゆっくりと一方通行は降り立ち、それを確認したあとその場を後にした。

無事に男達を巻き、なんとか病院に辿り着いた時にはもう夜だった。結局お姉様には会えず仕舞い。すれ違いで病院に戻っていればいいが、どうしたものだろうか。

「お姉様、戻られたのですかとミサカは確認します」

「オリジナルのお姉様とは会えましたかとミサカは問います」

妹達が出迎えてくれた。どうやらお姉様は戻っていないようだ。

「ただいま、結局お姉様は見つからなかったよ。その口ぶりだとこっちには戻ってきていないようだな。一息ついたらまた探しに行くよ。あと追っ手がいたから、みんななるべく外に出ないようにな」

追っ手がいる以上あまりみんなを外には出したくない。お姉様を探すのを手伝って欲しいがリスクが大きすぎる。仕方ないもう一度一人で探しに行こう。

外に出る。やや騒がしい。どうやら急患が運び込まれてきたようだ。ストレッチャーで運ばれていく急患の姿が目に留まる。

（えっ――――？）

見るからに痛々しく血まみれの姿でボロボロだった。

（なんで――――？）

だけど見覚えのある姿。

（お姉様が――――？）

カエル先生の話によると――――一時は本当に危なかったらしい。心停止も起きていたようだ。傷や全身打撲はいうに及ばず、鼻やあば

らが折れ、一番酷いのは左腕を複雑骨折したらしい。今も意識は戻っておらず絶対安静が告げられた。

見つかった場所は昨日の橋の近くの公園。能力同士の私闘があると報告を受けた風紀委員が見つけたらしい。現場を見るからに苛烈な戦闘だったらしく、一帯は更地の上、ところどころ大地がえぐれ、街灯などの破片が転がっていたそうだ。

倒れていたのが第三位のレベル5ということもあり一時騒然としたそうだ。本来逆に倒すことがあっても倒されることがないのが当たり前の実力を持つレベル5が倒れていたのだから当然だろう。

お姉様を倒したのは誰か――。状況証拠でしかないが、ある種確信があった。レベル5で第三位であるお姉様をここまで一方的に倒せる相手。見つかった場所。これは……一方通行の仕業だろう。

おそらく俺と会った後にお姉様が一方通行と遭遇、恐らく実験のことで戦ったのだろう。結果は悔しいが樹形図の設計者が予言した通りということか。でなければレベル5であるお姉様が負けるなんてことは考えにくい。他のレベル5の可能性がないことはないが場所が場所だけに一方通行の可能性が高い。

――これはつまり一方通行が敵に回ったということか。

くそっ、なんであの時もっとよく探さなかったんだ！そうすればお姉様があんな目にあわなくて済んだかもしれないのに！ああ、畜生！

第三十話

容態は安定したとはいえ、未だ意識が覚めないお姉様。絶対安静面会謝絶なため傍にいて看病することもできない。何もできないという無力感に苛まれながらネガティブなことばかり考えていた。

お姉様のこと、一方通行のこと、妹達のこと、砥信さんのこと、実験のこと。

どうすればいい？なにができるんだ？不安や焦燥で考えがまとまらない。実験開始のリミットが迫ってくる。だが解決策は見つからず只時間を浪費するだけだった。

ああくそ！苛立ちの余りに壁を殴りつける。

「大丈夫ですかお姉様、とミサカは心配します」

「大丈夫だ！」

思わず声を荒げてしまう。……。

「……すまん」

「いえ気にしないでください」

「ほんとにどうしていいかわからないんだ。お姉様は倒れてしまったし、一方通行は敵に回った」

状況は悪化している。打つ手は殆どない。

「ならば学園都市の外に逃亡しますか、とミサカは提案します」

外に逃げる。学園都市は壁で覆われており外部からの出入りを制限している。警備も厳重で通常であれば逃げるのは難しいだろう。元々はお姉様がいれば突破できる可能性が高かったが今は武装でもしなければ難しい。

それにこの案を保留した訳は時間がかかるということ。それはつまり――――他の妹達を見捨てるということになる。例え外部から助けを得られたとしても、実験で犠牲になる妹達が出ていることだろう。

正直な所、今の状況はかなり酷い。その中で妹達のことを助けるのは困難極まりない。だから諦めるか？

お姉様の姿が脳裏に過ぎる。傷だらけで生きているのが不思議なくらいボロボロの姿。一方通行はお姉様にしたように残虐に殺すだろう。そんな目に妹達を逢わせたくない。

「絶対にそれはダメだ」

しっかりしろ！お姉様が倒れた今、自分達以外助ける人はいないんだから。頬を叩き気合いを入れ直す。お姉様は最初一人で戦ったんだ。自分はまだ妹達がいる。だからやらないでどうする！

……？そういやお姉様は昨日何をやろうとしてたんだ？たまたま一方通行と遭遇して戦闘になったとは考えにくい。あの状況だと実験を止めるために動いていたはずだ。一方通行と遭遇しただけならば逃げるべきである。一方通行から攻撃してきたんだろうか？いや考えにくい。一方通行が戦うことで得るメリットがない。あの時の

不良達も一方通行を襲ったから、反撃されたに過ぎない。

となるとお姉様が意図的に会い、お姉様から戦ったことになる。目的は一方通行の排除か？いや樹形図の設計者や能力を知っているとなると、負ける可能性が高いとわかっていた筈だ。では何のためだろう？

「なあ、お姉様はどうして一方通行と戦ったんだと思う？昨日恐らくお姉様は何かを思い付いて、実験を止めるために一方通行と戦ったんだと思うんだけど」

「確かに一方通行を倒すなら能力から考えてこちらに勝ち目はないでしょう、とミサカは推測します。となると、寧ろ戦うこと自体が目的なのではないのでしょうかとミサカは結論付けます」

戦うこと自体に意味があった？お姉様と一方通行が戦うことでどうなるんだ？

実験は妹達を二万人殺害し、その戦闘経験を得ることで成立する。元々一二八人のお姉様を殺害する予定だったが用意できないためにこのようになったのである。だから二万人の妹達の代わりにレベル５のお姉様一人が戦ったところで完了するわけじゃない。しかも殺害されていないのだから実験自体も完了したわけじゃないし。

あれ……待て待てよ。

確かに殺害されることが実験のプロセスに含まれている。しかしゲームとは違い相手を倒さないと戦闘経験が得られないわけじゃない。殺される前までにも確実に蓄積されるものだ。

「一方通行とお姉様が戦うのは計画外の戦闘だよな。となるともし

かして今までスケジュールされた実験通りに進められないんじゃないか」

スケジュールは緻密なものだったはずだ。ならばレベル５一人が戦えばどうなるだろう?単純に数百人の妹達を実験に相当する経験を得、それが実験の短縮に繋がるのか?

「そうですね。恐らく計画外の戦闘は樹形図の設計者の予測演算に誤差が生じ、修正できない程の歪みである場合、実験は停止するでしょう、とミサカは予測します」

これかお姉様の狙った事は!レベル５が全力を尽くした戦闘だ。となると演算の誤差は大きいはず。

「ですが樹形図の設計者が有る限り再演算され実験は継続されるはずです、とミサカは断言します」

「それに実験の修正が必要かどうかは樹形図の設計者でないと判断できないのではないでしょうか、とミサカは疑問を投げ掛けます」

そうか樹形図の設計者が有る限り、この実験は修正できる。研究者は機械の言いなりに動いているのだ。それに都合良く修正が必要だと演算されるかはわからない。

「だったら、樹形図の設計者に嘘の演算を出させて壊せばいい」

そこまでがお姉様の計画だったのかもしれない。本来一方通行との戦闘は余力を残した上で切り上げる筈だったんだろう。しかし、一方通行が予想以上に強すぎて余力を残せなかったのかもしれない。

お姉様は一人で終わらせようとしてたのか……もしそうなら意識

が戻った時お仕置き決定だな。全くもう少し頼ってほしい。

けど道は切り開いてくれた。ありがとうお姉様。絶対にその行為は無駄にはしない。

となると、俺達が次に行わなきゃならないことは決まった。

世界最高のスーパーコンピュータ「樹形図の設計者」と交信を行う情報送受信センターの襲撃及び「樹形図の設計者」の破壊。

お姉様が作ってくれたチャンス。必ずモノにしてみせる！

第三十一話

唐突だが、学園都市の地理について簡単に話そう。

学園都市には二三の学区が存在する。各学区はそれぞれ特徴みたいなものがある。まあなにかに特化させたエリアや特徴的な施設があると考えてもらえばいい。例えば、行政関係を集めた学区、外部からの来賓を迎えるための学区、研究所を特に集めた学区、商業施設を集めた学区などだ。ちなみにカエル先生の病院は第七学区になる。

その中でも航空や宇宙開発を専門とする施設が多く集まったエリアがある。それが第二三学区。最先端のロケット発射場がある学園都市宇宙センターや樹形図の設計者との交信を行う施設である情報送受信センターがあるエリアだ。

『樹形図の設計者』情報送受信センター――世界最高のスーパーコンピュータである樹形図の設計者の窓口となる最重要機密施設である。ここから決まった時間に樹形図の設計者と交信し、予測演算させたいデータを送信したり、その演算結果を受信する。ここ以外にデータの送受信は出来ない。唯一の窓口なのだ。

蛇足かもしれないが、樹形図の設計者についても説明しよう。樹形図の設計者は世界最高峰のスーパーコンピュータである。学園都市の天気予報はこれによって演算された予報であり、何時何分に雨が降るなど正確に演算できるほどだ。

樹形図の設計者は何故人工衛星に載せられているのか――これは樹形図の設計者の性能が他国のスーパーコンピュータを遥かに上回る性能のため、様々な組織に狙われており奪われないように宇宙に

退避させたのである。学園都市を除けば普通宇宙にロケットを飛ばせるのは特定の国家ぐらいしか存在しないし、打ち上げた時点でどの国が打ち上げたかは特定が容易だ。そのため他の組織が手が出せないのである。だが虎視眈々と隙あらば狙っているらしい。

それだけ高性能な樹形図の設計者に「一方通行と超電磁砲との戦闘によって実験の継続は不可能」あるいは「実験の修正が必要」と嘘の予言をさせて壊せば、再演算できなくなり、実験は頓挫して妹達がお払い箱となる。実験から解放されればカエル先生が自身の研究に組み込む形で妹達の身柄を確保し一件落着となるわけだ。

壊しても学園都市の上層部が樹形図の設計者を直してしまったら実験は再演算されることはないのかと疑問に思うだろう。しかし、それは不可能なのだ。

それは何故か。考えてもみて欲しい。他の組織は樹形図の設計者を得るために様々なアプローチを行っているはずである。なのに何故宇宙に飛んでいる現物を虎視眈々と狙うのか。例えば樹形図の設計者の設計図を盗んだり、開発者を勧誘または拉致して情報を得、独自に再現したほうが容易ではないのか。勿論外と学園都市の技術レベルから再現できないという問題もある。しかし一番の理由は樹形図の設計者の中枢部の設計図が失われており、もはや再現不可能となっているからである。そのため現物である樹形図の設計者を狙うしかないのだ。

これは逆にいうと学園都市ですら再現不可能ということにもなる。だから、樹形図の設計者の外殻は頑丈に造られているそうだ。

つまり樹形図の設計者を破壊すれば、学園都市で新たに造り出すことは出来ない。新たにスーパーコンピュータを造っても樹形図の設

計者の性能からみれば大幅に劣ることだろう。

樹形図の設計者の破壊に関しては人工衛星を操作する。元々人工衛星は遠隔にて操作できる。操作した衛星を大気圏に突入させて燃え尽きさせればいいだろう。突入時の角度を深くすればできるはずだ。

また嘘の予言に関してだが、お姉様なら可能かもしれないが樹形図の設計者を直接操作し改竄させるのは俺では無理かもしれない。だが、送受信センターにある樹形図の設計者との送受信用の端末ならば遥かに改竄しやすいはずだ。樹形図の設計者にあるであろう送受信のログを見ればこんな小細工はすぐにバレるだろうが、肝心のログは大気圏突入にて消滅する予定である。演算結果を操作したかはバレない可能性が高い。

これが今回の作戦の全貌である。

この作戦はタイミングが要求されるものだ。実験関係者から実験の再演算を申請されていなければアウト。申請されていたとしても既に演算結果が送られていてもアウトだ。再演算の申請が行われており、尚且つ演算結果は送られていない状況。この状況の時のみこの作戦が有効である。

樹形図の設計者との交信は時間が定められていて、昨夜お姉様が倒れる前にだからはまだ交信は行われてはいない。問題は再演算するかどうかの申請が行われているかどうかだ。

それを調べるために近くの研究所を襲撃する。今回は俺の他にも妹達も一緒だ。最初は一人で行くつもりだった。しかし、お姉様のこともあって心配したのか同行してもらうことになった。研究所の警備はゼロではないし、状況によればこのまま送受信センターに向か

うため消耗を防ぐこと、最重要施設のため襲撃も容易ではないからだ。警備は厳重だし運用している人間もいるので制圧するのに一人では無理だと正論で諭されてしまうとぐうの根も出ない。

でまあ、研究所に侵入したわけだが。なんというか呆気なく侵入できた。以前の研究所ならば侵入、脱出にも苦労したのだが、引き継ぎ先の研究所のセキュリティは甘く、潜入スキル持ちの妹達に無効化されていった。

これは憶測に過ぎないが、お姉様が襲撃を繰り返したことにより引き継ぎは防衛力より数を優先させたためセキュリティが甘いのかもしれない。

そして研究所の端末から幾つかの情報を入手した。

まず、１８０００人の妹達が製造段階にあること。つまりあと１２日で実験のための二万人集まることになる。

そして妹達が俺達の追跡に駆り出されているようだ。研究所内にいれば一緒に逃げようかと思ったが、ここの妹達も探しに出てしまっているらしい。

最後に申請についてだが、やはり一方通行とお姉様の戦闘は観測されていたらしく既に行われているようだ。よし、状況は想定通りだ。

あとは乗り込むだけなんだが――。

「あの皆さん、それはなんですか？」

妹達の手にはアサルトライフルが。てかなんでそんなものがこんな

ところにあるんですか！？

「一方通行との実験で使用する予定の銃器、Ｆ２０００Ｒです。どうやら実験で使用する武装は各研究所で保管されているようです。送受信センターは厳重な警備が想定されるため武装による強化は必須です、とミサカは胸を張って答えます」

「お姉様もどうぞ」

そういわれ手渡される銃。本物の銃って触ることなんか憑依前ですら無かったけどプラスチックな材質の銃でなんというか玩具みたいだなあ。現実感が伴わないまま研究所を後にした。

第二三学区、樹形図の設計者送受信センター。立入禁止と書かれたフェンスの前に並ぶ俺と妹達。

さあ作戦の決行だ――――。

第三十一話（後書き）

樹形図の設計者の設定に関しては捏造です。

第三十二話（前書き）

一部修正しました。

名前の間違いと樹形図の設計者の一部を削除しました。

樹形図の設計者の天気予報は一ヶ月まとめてですからね。間違えてました。

第三十二話

フェンスの前には小型の警備ロボがいる。不審者と判断した場合、取り囲んで警報を鳴らすタイプだ。最重要施設の立入禁止区域だ、当然厳重な警備が敷かれておりロボやフェンス越しにも赤外線式であろうセンサーみたいなのも沢山みて取れる。

さっきまでは捕まらないように、地下を通ってなるべくバレないようにしてきたが、ここまでくればバレるのは確実だ。気にする必要なんてない。

「準備はいいか？」

その言葉にみなコクリと頷いた。

「じゃあ――――行くぞ！」

アサルトライフルで警備ロボやセンサーをぶち壊し、一気に入口まで駆け抜ける。恐らく中の警備はとっくに異常に気付いているだろう。警報が鳴る前に破壊してるとは言え、次々とロボットやセンサーの反応が無くなっているのだ。一部なら故障と疑うかもしれないが、ここまで同タイミングだと襲撃以外考えられない。

それにしてもアサルトライフルは凄い性能だな。洗脳装置で銃器の扱いには慣れていたが、割と大きな銃なのにほとんど反動がないため非常に使いやすい。別称、オモチャの兵隊（トイソルジャー）と呼ばれるのこのアサルトライフルは名前の通りプラスチックの外見も相まって玩具にしか思えないが、威力を知ればやっぱり本物の銃なんだと実感する。こんなの実験に使おうとしてたのかと思うと……想像しただけだけど顔は多分引き攣ってるんだろうな。一方通行は反射するから当たらないかもしれないが、跳ね返った弾でこっちがバラバラにされそうだ。それにこの銃に備え付けられたグレネードは使用してないがきっとろくでもない威力なんだろうな。

迎撃に来たであろう警備員は電撃で気絶させ無力化しつつどんどん先に進んでいく。そして交信室にまで辿り着いた。緊張しながら扉を開ける。中には誰もいない。どうやら襲撃に気付いて非戦闘員は避難したようだ。

交信時間まではまだ時間がある。交信させると同時に書き換え、樹形図の設計者を載せた人工衛星「おりひめ１号」を操作するだけでも相当時間がかかるため、その間はここを制圧し続けなければならない。１５人の妹達が入口を封鎖、死守しつつ俺と残りの妹達が端末を操作、ハッキングする体制だ。

まずは再演算依頼が届いているかの確認だ。端末のセキュリティロックを解除し演算依頼の項目を検索する。研究所で調べた通り依頼は間違いなく届いていた。今日申請されたばかりだが上層部の申請は受理されており、交信待ちである。あとは交信時に結果を書き換えるだけだ。

次に衛星の操作を行う。衛星の落下位置や大気圏突入の角度の割り出しを行った。万が一燃え尽きなかった場合、街に落下したら大惨

事だからな。落下する場合は海になるように調整する。大気圏に向かうようにセットして準備完了だ。時間にして二時間。そこを過ぎればもう重力により軌道修正ができなくなる。二時間か、割と長く感じるな。二時間はここを死守しなくてはならない。早く時間にならないだろうか。

焦りが募る。しかし時間は想像以上に進まない。

そんな時ガリガリと物凄い音を立てながら扉がこじ開けられた。嘘だろ!?電子ロックされた鋼鉄製の扉だぞ?!

扉を手でこじ開けてるのは一人の小柄な少女。そんな小さな体のどこに恐ろしい程の怪力を秘めているんだろうか。――いや手じゃない。よく見ると、扉と手の間には隙間がある。どちらかと言えば手に膜みたいなものがあってそれで押しているのか?となるとこいつの能力は空気を操る能力か!?空気を操る能力者いわゆる空力使いは初めて見たがあれだけの力を持っているとなるとレベルは高いんだろう。

「ようやく見つけました。超大人しくして下さい」

どうやら追っ手らしいな。こんな子供まで動員するのか。

「研究所からの追っ手か?こんな所までわざわざご苦労さん。ってことで見逃してくれると助かるんだけど」

「私達は超仕事しているだけです。超諦めて捕まって下さい」

「悪いけどまだ捕まるわけにはいかないんでな。精々悪あがきさせてもらうさ!」

流石にあんな子供を撃つのは気が引けるが、電撃を当て気絶させたいところだ。妹達は足元を狙い威嚇射撃を行うが少女は弾丸を避けようとする素振りも見せない。

「私の窒素装甲（オフェンスアーマー）に銃は効きませんよ。超無駄撃ちです」

ううむ、空力使いだから能力的に電気を通さないことはないだろうけど。ならば時間を稼ぐか。

「成る程、その能力は弾丸すら防ぐのか。だから前に出られると。てかさっきから超超言ってるけど、今また流行ってんの？大分昔は流行ってたけど」

使われなくなったわけじゃないけど、彼女結構頻度高いよね。こっちの世界じゃ流行ってるんだろうか？あるいは超が流行った世代が親な娘さんだろうか。

「本人を目の前にして流行に乗り遅れていると指摘するのは可哀相です、とミサカは嗜めます」

「流行はまた巡るそうです。このまま続ければ時代の先駆者になれるのではないでしょうか、とミサカは希望的観測を述べます」

「流行ではなく個性の追求ではないでしょうか？布束砥信も英語混じりでしたし。多少馬鹿ぽくても個性は大切です、とミサカは自分のナイスフォローに称賛を贈ります」

いやいやお前さん達そこまで言ってねーし、それフォローでもなんでもないから。というかダメ押しだから！なにそのミサカジェット

ストリームアタック！こうかはばつぐんだ！みたいなんですけど！なんか相手プルプル震えているんですけど！口をキュッと閉めてなにかを堪えるようにプルプルしてるんですけど！ヤバいなんか小動物系にかわいい！嗜虐心がそそられますね。……Sなんかな俺。

「……うん、なんかゴメン」

「……ッ！」

なんか嫌な予感が……ってオイ、あのその壊れかけの扉を剥がしてどうする気でしょうか？あーなんとなくわかるんですけどね。

「フン！」

掛け声と共に飛んで来る鉄の塊。やっぱ投擲かい！ぜ、全員退避――ッ！！！

？！ってこんな場所で避けたら！ああ〝っ――――！

おまけ

開かない扉。その前に金髪の少女――――フレンダ＝セイヴェルンがいた。

「どうしたの？フレンダ」

ピンクのジャージ姿の少女――滝壺理后が声をかける。二人は学園都市の暗部「アイテム」の構成員である。

「実は絹旗が出てこないのよ」

絹旗最愛。彼女もアイテムの一人である。先日、とある依頼を受け研究所を防衛していた。しかしアイテムの下部組織の一人が研究所の実験動物に発砲し逃走されるハメに。責任を取らされる形で逃げ出した実験動物を探すハメになったのだが……。話を聞く限りその実験動物に口調のことでバカにされたらしい。まさかこんなことで落ち込むとは思わなかったが。

フレンダは小声で事情を説明すると滝壺は徐に扉に向かって声をかけた。

「大丈夫だよ、きぬはた。例え口調が変でも私はそんなきぬはたを応援してる」

ピシリと空気が凍り扉の奥から重い空気が漂ってきた。

「滝壺、結局それって追い打ちな訳よ……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8634w/

とある科学の完全調整（フルチューニング）

2011年11月16日22時12分発行